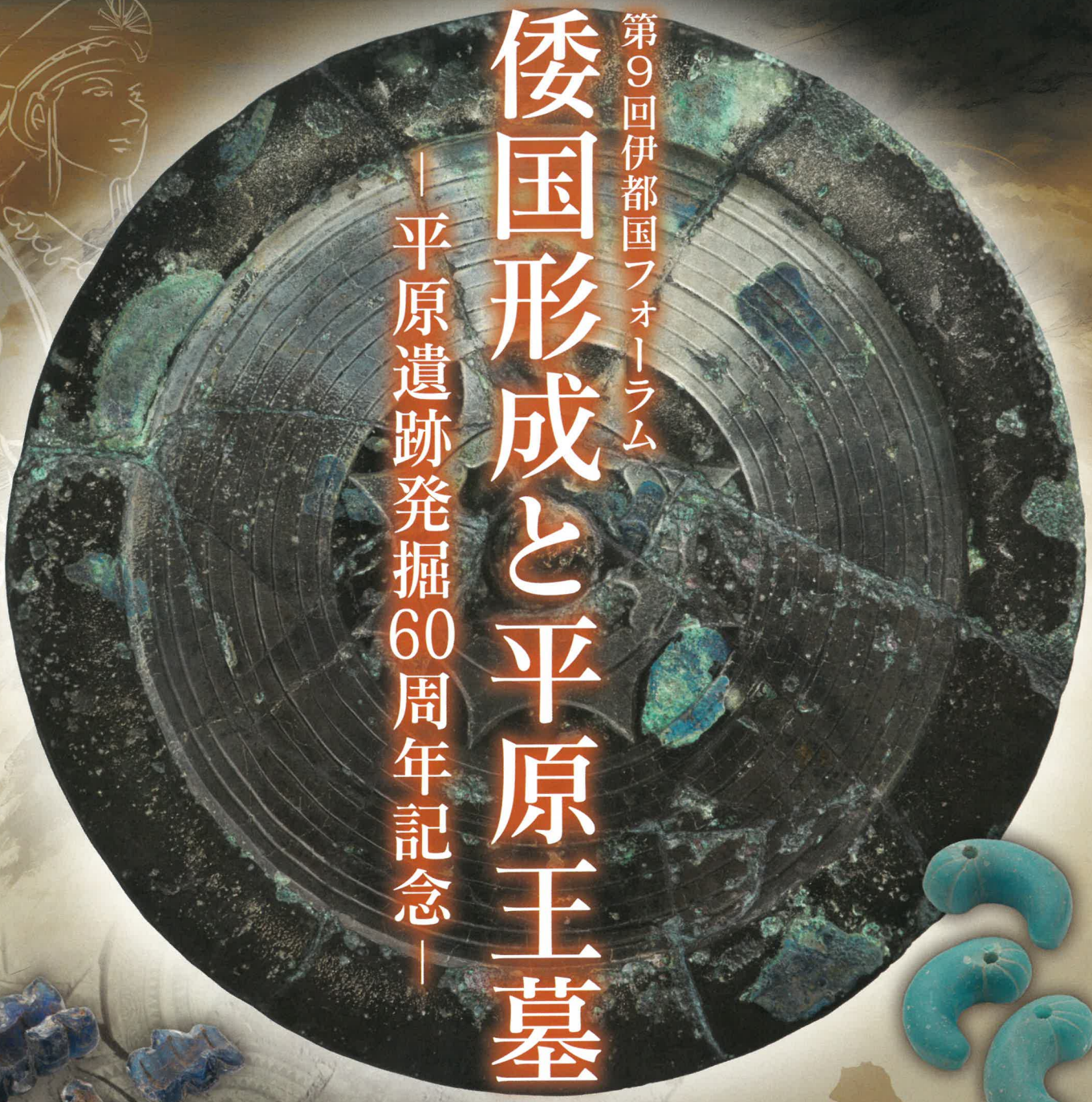
第9回伊都国フォーラム

# 倭国形成と平原王墓

## ―平原遺跡発掘60周年記念―




ごあいさつ …… 1

調査報告
「平原王墓の調査と伊都国の性格」…… 2
平尾 和久（糸島市地域振興部文化課）

基調講演1
「平原巫女王墓とイト国が果たした役割」…… 10
柳田 康雄（國學院大學博物館客員教授）

基調講演2
「ユーラシア的視点から見た
平原王墓出土ガラス玉類の国際性」…… 18
田村 朋美（奈良文化財研究所 主任研究員）

基調講演3
「大型化する弥生墳墓と平原王墓」…… 26
南 健太郎（京都橘大学 文学部 歴史遺産学科 准教授）

シンポジウム
「伊都国最後の王墓、平原王墓に迫る」…… 34
コーディネーター　河合　修（糸島市地域振興部文化課）

資料
平原遺跡 …… 36


糸島市

## 第９回伊都国フォーラム

# 「倭国形成と平原王墓」

## プログラム

10:00 ～ 10:10　ごあいさつ

**【第１部　報告・講演】**

10:10 ～ 10:30

**調査報告**

「平原王墓の調査と伊都国の性格
　― 平原王墓発見から今日までのあゆみ ―」

平尾 和久（糸島市地域振興部文化課）

10:35 ～ 11:45

**基調講演１**

「平原巫女王墓とイト国が果たした役割」

柳田 康雄（國學院大學博物館客員教授）

11:45 ～ 12:45　昼休み

12:45 ～ 13:35

**基調報告２**

「ユーラシア的視点から見た平原王墓出土ガラス玉類の国際性」

田村 朋美（奈良文化財研究所主任研究員）

13:40 ～ 14:30

**基調講演３**

「大型化する弥生墳墓と平原王墓」

南 健太郎（京都橘大学文学部歴史遺産学科准教授）

14:30 ～ 16:00

**【第２部　シンポジウム】**

「伊都国最後の王墓、平原王墓に迫る」

コーディネーター：河合 修（糸島市地域振興部文化課）

パネリスト：柳田 康雄・田村 朋美・南 健太郎・平尾 和久

# 凡　例

1. 本書は、糸島市が主催する第９回伊都国フォーラム「倭国形成と平原王墓―平原遺跡発掘60周年記念―」の発表要旨集である。
2. 当シンポジウムは国庫補助事業「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として実施した。
3. 本書における参考文献等各種表記は各執筆者の表記に基づく。

# ごあいさつ

糸島市は、３世紀のわが国について記された歴史書『魏志』倭人伝に登場する「伊都国」の故地で、古来より中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点として、わが国の文化・国家形成に重要な役割を果たしてきました。

この伊都国を象徴する遺跡のひとつが平原王墓です。『魏志』倭人伝には、伊都国には代々王がいたことが記されていますが、これまで３つの王墓が確認されており、その最後に平原王墓が築かれました。

平原王墓は昭和40（1965）年に発見・調査された墳墓で、糸島市のシンボルでもある日本最大の内行花文鏡をはじめとする出土品は、平成18（2006）年にすべて国宝に指定されています。この国宝指定により平原王墓出土品は、糸島の宝から日本の宝として、ひろく人々に親しまれる存在となりました。

今年は平原王墓発見・発掘から60周年にあたることから、国内の著名な研究者をお招きして『倭国形成と平原王墓』と題したフォーラムを開催し、日本の国家形成期における伊都国の役割やその国際性等に関する講演や討論を行います。これらを通じて、伊都国の魅力とともに、本市の歴史の奥深さを楽しんでいただければ幸いです。

令和7年10月26日

糸島市長　　月形　祐二

[調査報告]

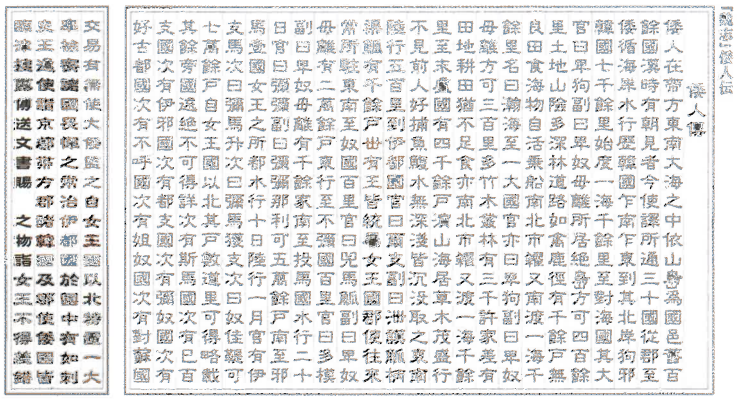
# 平原王墓の調査と伊都国の性格

## ― 平原王墓発見から今日までのあゆみ ―

糸島市地域振興部文化課
平尾　和久

### Ⅰ．はじめに

糸島市は３世紀の歴史書『魏志』倭人伝に登場する「伊都国」の故地です。伊都国から周辺を眺めてみると、海を介して北に一支国・対馬国があり、西に末盧国、東に奴国と境を接するという環境にあり、いわゆる倭人伝の国々を知る一つのかなめが伊都国であるといえます。



第1図　『魏志』倭人伝に記された伊都国

### Ⅱ．『魏志』倭人伝からみた伊都国の姿

『魏志』倭人伝は『三国志』の中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称で、当時の日本列島について、約2000文字を費やした記述が認められますが、そのうち伊都国に関する記述は110文字程度で、倭人伝の国々で最も多くの情報が含まれています。その中からいくつか紹介すると、

- 末盧国から東南方向に陸路で進んで伊都国に至ること。
- 官が一人、副官が二人の体制であること。
- 戸数は千余戸である（魏末晋初に纏められた『魏略』には「万余戸」とある。）
- 世々王あるも、皆女王国に統属すること。
- 郡使の往来常に駐まる所であること。
- 女王国より以北には、特に一大率を置き、諸国を検察させ、諸国がこれを畏憚していること。

などの記述があります。

特に、「世々王」という記述は注目されるもので、現在の朝鮮半島のことを記した『魏志』韓伝では「僭号称王」や「自号漢王」という記述があり、中国が正式に認めない王号については僭号や自称という表記となっており、伊都国の王はある時期から王として広く認められていたことを示す重要な記述といえます（仁藤 2004）。

また、対馬国では「道路は禽鹿の径の如し」、末盧国では「草木茂盛し、行くに前人を見ず」とあり、道路とはいえない獣道のような道があると記されていますが、伊都国関連では道路に関する記述はありません。そこから間接的な解釈ですが、伊都国や奴国では中国からの使者が見ても違和感がない道路が存在したことが想定され、実際に遺跡からは道路状遺構も確認されています。

このように『魏志』倭人伝には文字資料として伊都国関連の情報が多く含まれていますが、考古資料として伊都国を象徴するものが平原王墓です。以下、平原王墓の発見から今日までのあゆみを概観したいと思います。

### Ⅲ．平原王墓の発見から今日までのあゆみ

平原王墓は昭和40（1965）年に発見・発掘されましたが、今日までのあゆみを

第１期　平原王墓の発見から報告書の刊行まで（1965 ～ 1991年）

第２期　市による調査と報告書の刊行（1991 ～ 2000年）

第３期　平原王墓の整備と出土品の国宝指定（2000 ～ 2006年）

第2図　伊都国の位置

第４期　国宝指定から今日まで（2006 ～ 2025 年）の４期に分けて概観します。

**第１期　平原王墓の発見から報告書の刊行まで（1965 ～ 1991 年）**

昭和 40（1965）年１月 18 日にミカンの植樹に伴い平原王墓が発見されました。のちに調査を担当する原田大六氏（1917-1985）への一報は２月１日の夕刻で、糸島高校教諭の大神邦博氏（1937-1976）からもたらされたものでした。出土した鏡類は地権者の井手勇祐氏が保管されていましたが、それをみた原田氏はのちに「これこそ王墓の副葬品だと直感した」と記しています（原田 1966）。翌日の早朝に現地を確認したのち、各種手続きを行い、２月４日から発掘調査が開始されました。この時には掘り出された土の中に含まれる鏡の破片や玉類を確認するために糸島高校・前原中学・怡土中学の生徒を動員するなどして 40 日間の水洗作業を行いつつ、５月 17 日まで調査が行われました。この調査には当時、國學院大學の学生であった柳田康雄氏も参加されています。

この時の発掘調査では３・４号墓、後に大柱と性格づけられる井戸も確認されましたが、その核となるのは、伊都国の王墓と評価される１号墓です。平原王墓では割竹形木棺を納めた 4.6 m×3.5 mの墓壙の四隅で方格規矩鏡を中心と鏡が破砕された状態で出土し、その総数は 42 面とされました。同年には概要報告書が刊行されるとともに（福岡県編 1965）、翌 1966 年には今日まで読み継がれる『実在した神話』が刊行されました（原田 1966）。本書は原田大六氏自身の研究のあゆみから始まり、平原王墓の発見と調査成果、王墓の被葬者像など多岐にわたる論点が含まれますが、特に注目したいものが天体観測に関する議論です。日本考古学では天体観測に関する議論は 2010 年代以降に活発化しており（北條 2017）、原田氏の先見性の高さを示すものといえるでしょう。

また、1969 年には博多井筒屋で『伊都国王墓展』が開催されました。５月 30 日から６月 11 日までのわずか 12 日間の開催でしたが、平原王墓出土品の初公開の場となるものであったことから、新聞によると約 27,000 人の来場者数で、平原王墓の調査成果への関心の高さが窺えます。

通常、発掘調査が終わると、報告書刊行に向けた出土品の整理が始まります。この段階で出土状況に基づく出土品の接合、図化・拓本採取、写真撮影等を行いますが、平原王墓の鏡は破砕され小片化していたことから、その接合・復元に多大な時間が費やされました。その整理期間中の 1982 年には曽根

①ガラス耳璫
耳を飾るピアス。漢の時代、貴族の女性が身に着けていた。日本で唯一の発見例。

②ガラス連玉（右）と断面写真（左）
二重構造になっており、内側に気泡を多く含むガラス、外側に気泡の少ないガラスを使う。

③ガラス勾玉
頭部に4条の沈線のある丁字頭の大型勾玉。深みのある青色。

⑤メノウ管玉
美しい赤色の管玉。良質のメノウで作られる。

④ガラス小玉
紺色の美しい小玉。

⑦素環頭大刀
全長 80.2 cm。ほとんど反りを持たず、直線状をなす。

⑥ガラス管玉
青緑色で半透明のものや風化し、白色や茶色になったものがある。

第3図　平原王墓の副葬品

遺跡群（銭瓶塚古墳・ワレ塚古墳・狐塚古墳・平原遺跡）として国の史跡に、出土品は 1990 年に国の重要文化財に指定されました。このように遺跡・出土品共に恒久的に保存できる道筋ができたことは、関係各位の努力等はさることながら、重要な遺跡に遭遇して植樹を思い止まった地権者の理解があったからこそだと思います。

また、原田氏は 1978 年にこれまでの調査・研究の功績が認められ西日本文化賞を受賞します。その功績として「伊都国など福岡県内を中心に独立独歩、考古学の研究、発掘に携わり、旺盛な在野精神をたぎらせて独創的な研究成果を挙げられ考古学界や地域社会に大きく貢献」したことが記されています。ただ、原田氏は報告書の刊行を見ることなく 1985 年 5 月 27 日に亡くなります。享年 68 歳。その遺志は神田慶也氏を委員長とする平原弥生古墳調査報告書編集委員会へと引き継がれ、1991 年に報告書『平原弥生古墳大日霎貴の墓』が刊行されます。なお、この報告書の刊行によって 1965 年の発掘調査成果が明らかにされるとともに、これまで 42 面とされていた鏡の面数が出土品整理の成果として 39 面とされました。

なお、1987 年には伊都歴史資料館が開館し、2 階の第 1 展示室では大鏡をはじめとする平原王墓出土品が展示され、広く一般に公開されました。

## 第２期　市による調査と報告書の刊行（1991 ～ 2000 年）

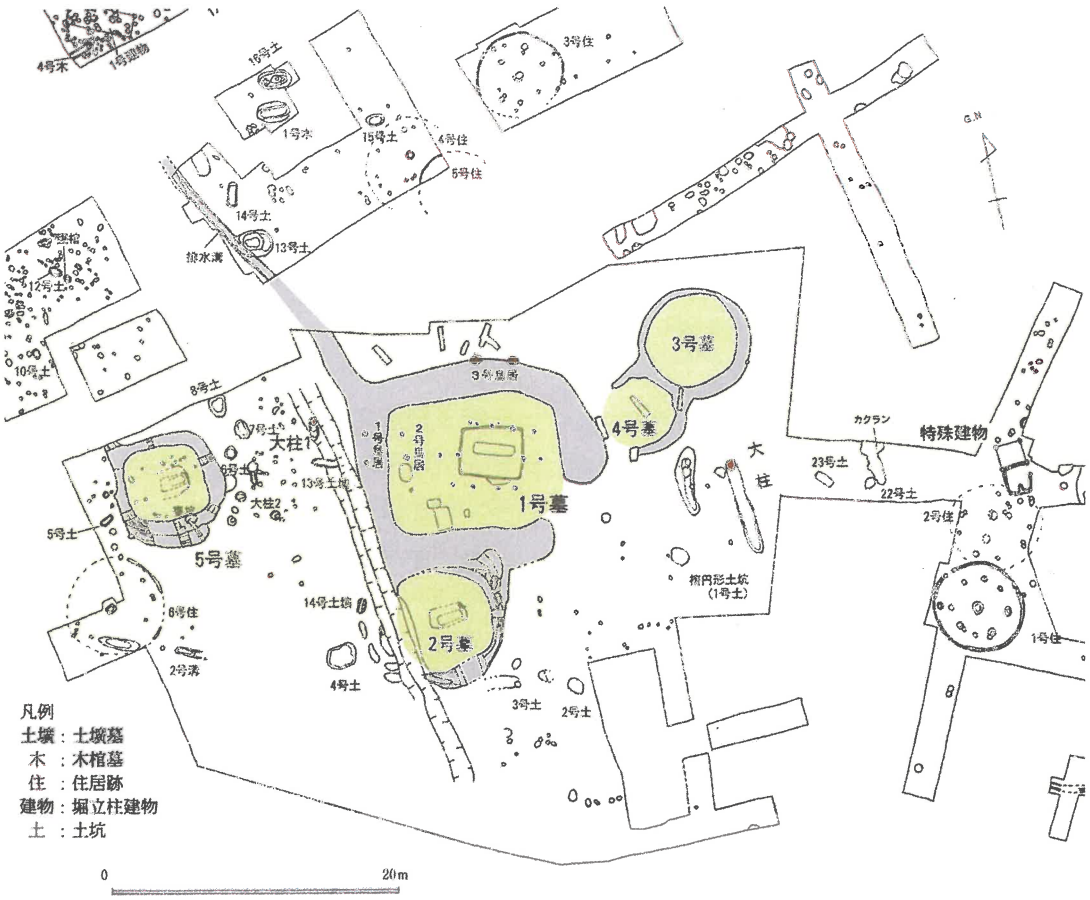
第２期は報告書の刊行に伴い、平原王墓に関する研究が進展する段階です。岡村秀典氏は平原王墓から 30 面以上出土した方格規矩鏡の時期を漢鏡５期前半に比定したうえで、遺跡の時期も弥生時代後期前半に位置づけました（岡村 1993）。この論文により平原王墓が本格的に議論の俎上にのったことは重要な点で、その年代論は今日まで続く議論のひとつとなっています。

第１期の後半にあたる 1988 年から前原町教育委員会（現糸島市）による平原遺跡周辺域（平原周辺遺跡）の発掘調査が開始されます（～ 1995 年）。これは平原王墓の周辺にどのような遺構が広がるのか確認することを目的としたもので、調査の結果、弥生時代前期末～中期初頭の集落が展開していることが明らかになりました。1990 年には平原王墓の西で墳墓が確認され（５号墓）、平原王墓を中心とする墓群が弥生時代後期初頭から営まれ出したことが判明しました。また、1998 年には王墓と周溝を共有する２号墓の調査を行った結果、王墓より若干後出する墳墓であることが明らかとなりました。これら一連の調査によって平原王墓を中心とする墓域は曽根丘陵北側の限られた範囲に展開することが明瞭となりました。

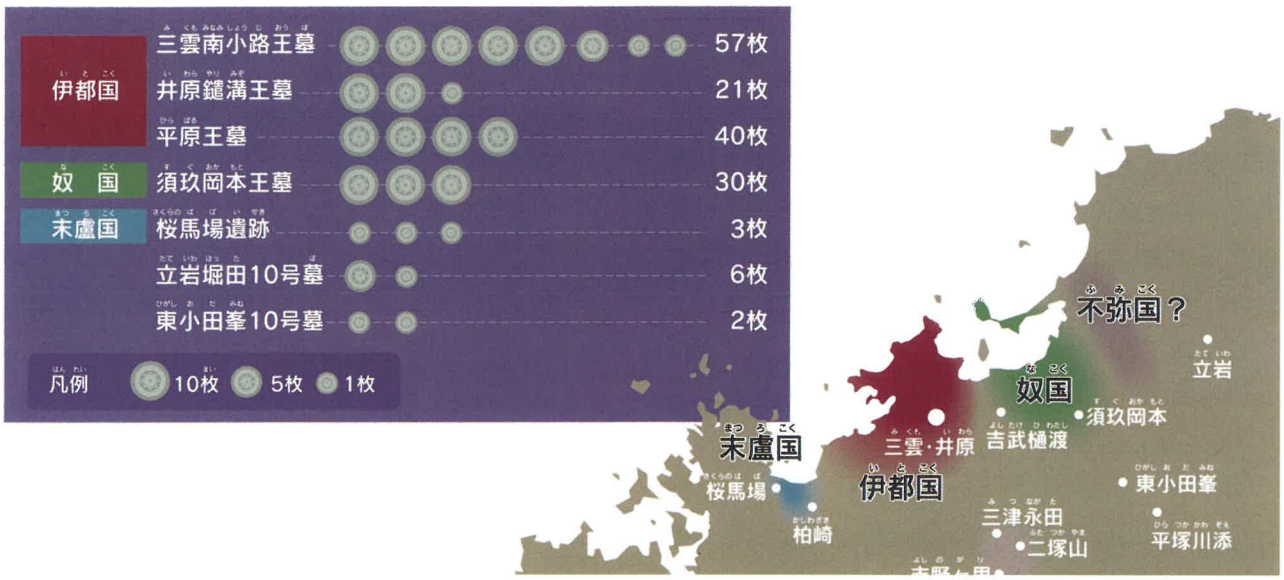
これらの成果をまとめた報告書が 2000 年に刊行されました（柳田・角編 2000）。この時に銅鏡の再検討が行われ、４面と認識されていた直径 46.5㎝の大鏡が、研磨方法の違い等から５面であると確認され、総数 40 面と報告されました（柳田 2000）。また、井戸と報告されていた遺構も大柱を建てた痕跡であるとされ（柳田・角編 2000）、以後、吉野ケ里遺跡や立石遺跡（春日市）、楯築墳丘墓（岡山県倉敷市）など同様の事例が増えてきています（境 2001、宇垣 2021）。

1995 年から 2005 年にかけては奈良文化財研究所で平原王墓出土品の修理事業が行われ、修理と合わせてレプリカの作成を行いました。

なお、市による発掘調査が進展しつつあった 1998 年には『実在した神話』の新装版が刊行され（原田 1998）、その巻末には渡辺正気氏（1921-2020）による王墓発見当時の状況や年代論に関す




第4図　平原遺跡の遺構配置図




第5図　銅鏡の出土枚数比較図

る研究動向など要点をまとめた解説が付されています（渡辺 1998）。

**第３期　平原王墓の整備と出土品の国宝指定（2000 ～ 2006 年）**

2000 年にはこれまでの調査成果をもとに、史跡が追加指定され、公有化・基本設計等の作成ののちに平原王墓の整備事業を行いました。整備前は王墓の主体部が露出した状態でしたが、整備事業で墳丘と周溝を復元し、2006 年 3 月 18 日に平原歴史公園として開園しました。これ以降、公園では秋になると遺跡とコスモスを楽しむ方々で賑わう姿が見られるようになり、平原王墓がより身近な存在となるきっかけとなりました。

2004 年 10 月 29 日には伊都国歴史博物館が開館しました。展示の中心は３階常設展示室にある平原王墓出土品で、展示室では王墓主体部の原寸大模型と出土品を対比しながら見ていく形にレイアウトされており、糸島市のシンボルともいえる平原王墓の理解を深める内容となっています。その２年後の 2006 年 9 月 6 日には平原王墓出土品が「福岡県平原方形周溝墓出土品」として一括して国宝に指定され、新規指定文化財として東京国立博物館でお披露目されました。この時の国宝指定により平原王墓出土品は糸島の宝から日本の宝として、ひろく人々に親しまれる存在になりました。この国宝指定を契機として平原王墓まつりが開催され、今日まで継続しています。このまつりは地元主体で運営され平原王墓ともに雷山校区の魅力を広く知ってもらう機会となっています。

**第４期　国宝指定から今日まで（2006 ～ 2025 年）**

平原王墓出土品は国宝に指定されたのち、糸島市を象徴するものとなっています。伊都国歴史博物館では出土品の国宝指定を記念して出土品図録を作成するとともに（岡部他編 2007）、国宝を収蔵・管理展示する館として、毎年秋に特別展を開催しています。とくに 2010 年には『昭和を駆け抜けた考古学者原田大六』展を通じて原田大六氏のあゆみと取り組みを回顧する展示を行い、好評を得ました。その後も平原遺跡出土品の分析が進められています（比佐・松園・岡部 2020）。

2015 年からは伊都国フォーラムを開催し、『伊都国女王と卑弥呼』（第１回）、『倭国誕生―伊都国から邪馬台国へ―』（第２回）で平原王墓をクローズアップしています。そして第９回となる今年は、平原王墓発見・発掘から 60 周年にあたり、平原王墓研究の最前線と国家形成に果たした役割等に迫るシンポジウムを開催します。本日は一日、平原王墓の魅力を堪能していただければと思います。

## Ⅳ．平原王墓の今日的論点

これまで平原王墓の発見から今日までを振り返りましたが、平原王墓を取り巻く論点をいくつか提示し、午後のシンポジウムに備えたいと思います。

**◎平原王墓の時期**

平原王墓からは土器の出土が少なく、土器からの時期の特定は難しい状況にあります。そこで副葬

第6図　銅鏡の大きさと比較

品から遺跡の時期に迫る手法をとることになりますが、大きく分けると①弥生時代後期前半（岡村 1993）、②弥生時代終末期（柳田 2000）の２時期に意見がまとまります。また、放射性炭素年代法のひとつであるＡＭＳ法による年代測定結果を重視する研究者は古墳時代開始の年代を古くする傾向にありますが（岸本 2014）、この点については反論も出ています（久住 2015）。

**◎銅鏡の製作地**

銅鏡の製作地は発掘当初から議論されています。現在は大きく分けると①すべて舶載鏡（辻田 2019、南 2019 他）、②舶載鏡と仿製鏡の組合せ（原田 1966、柳田 2000 他）の２つに分類されますが、後者にはいくつかのバリエーションが認められます。

**◎被葬者の性別**

人骨が伴わない場合、被葬者の性別は武器の有無等で推測されます。平原王墓の場合、素環頭大刀を１本副葬しますが、これが身分表象として中国から下賜されたものとすると、性別の決め手にはならず、そのほかの副葬品が鏡と装身具類ということで女性と推測されることが大半です。また、耳璫の存在も重要です。ただ、男性の可能性を指摘する見解もあります（寺沢 2023）

**◎墳丘の大きさ**

副葬品は弥生時代最高レベルの内容を示す平原王墓ですが、墳丘は 13 × 9.5 mと小さなものです。一方、国内最大級の規模を誇る楯築墳丘墓の副葬品は剣や玉などシンプルな構成となっています。地域による墳丘の大小と副葬品の多寡のアンバランスさにどのような意味があるのでしょうか。

**◎王墓の移動**

伊都国には代々王が存在し、現在のところ三雲南小路・井原鑓溝・平原の３つの王墓が確認されています。前２者は伊都国の王都とされる三雲・井原遺跡に所在しますが、平原王墓は西の曽根丘陵上に築かれます。なぜ王墓が移動するのか。その解釈も伊都国の性格を考えるうえで重要な点です。

**◎古墳時代へつながる要素**

これまでも古墳の始まりについてはさまざまな議論があり、各地の要素があつまり古墳が成立する説も提示されていますが（寺沢 2023）、大型鏡の副

葬など平原王墓から古墳時代の王墓へつながる要素をどのように考えるのか様々な見解があります。

このほかにもいろいろなポイントがありますが、発見後 60 年を経過しても論点を提供し続けることも平原王墓の魅力のひとつといえます。

このように『魏志』倭人伝に記される伊都国を象徴する平原王墓ですが、伊都国はひとつの遺跡だけで成り立つわけではなく、深江地区遺跡群や御床松原遺跡、今宿五郎江遺跡、元岡・桑原遺跡群などの沿岸部の遺跡、糸島の東西の結節点となりそうな潤遺跡群、伊都国の王都とされる三雲・井原遺跡などとの有機的なつながりのもとに伊都国が成り立っていることが近年の調査によって明らかにされつつあります。これらを総合的に検討することも伊都国の性格を読み解くうえで重要なポイントです。

## V. おわりに

以前、博物館に在籍しているときに、遠方からの来館者を 4 階展望室にご案内したことがありました。そのときに強く印象に残った言葉が糸島の風景を一望した時に言われた「『魏志』倭人伝の風景が良く残っていますね」という感想でした。私自身、何気なく毎日見ていたものですが、この風景は一夜にしてなるわけではなく、先人たちの営みの結果、このようなかたちとなったものです。

先に概観しましたが、平原王墓も発見当初は遺跡そのものが壊滅する可能性がありました。原田氏も最初に現地を見たときに「ひざ頭がくずれおちるようなショックを受けた」ことを記しています（原田 1966）。しかし、地権者をはじめとする人々の協力や決断、遺跡そのものの価値を見出した調査関係者の熱意や努力により、遺跡は国の史跡、出土品は国宝に指定され、発見から 60 年後の今日まで保存されてきました。次の 60 年へ繋げるために、今後はどのような努力や工夫が必要になるでしょうか。伊都国の風景や残された遺跡を後世へどのように伝え残していくのか、皆さんの知恵を結集していくべき時が来ているといえます。

第7図　現在の平原王墓

【参考文献】
宇垣匡雅2021「大柱遺構と木柱・立石」『楯築墳丘墓』岡山大学
岡部裕俊編2010『昭和を駆けた考古学者原田大六』平成22年度伊都国歴史博物館秋季特別展図録
岡部裕俊・平尾和久・江野道和編2007『国宝平原方形周溝墓出土品図録』伊都国歴史博物館
岡村秀典1993「「福岡県平原遺跡出土鏡の検討」『季刊考古学』43
岸本直文2014「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』185
久住猛雄2015「「奴国の時代」の暦年代論」『新・奴国展』福岡市博物館
境靖紀2001「弥生時代大柱祭祀の一例」『古文化談叢』47
辻田淳一郎2019「紀元後1～3世紀の地域間交流と鏡」『鏡の古代史』角川選書630
寺沢薫2023『卑弥呼とヤマト王権』中央公論新社
仁藤敦史2004「古代日本の世界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』119
原田大六1966『実在した神話』学生社
原田大六（平原弥生古墳調査報告書編集委員会）1991『平原弥生古墳大日孁貴の墓』
原田大六1998『実在した神話〈解説付新装版〉』学生社
比佐陽一郎・松園菜穂・岡部裕俊2020「平原遺跡出土の異形金属器」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』15
福岡県教育委員会編1965『福岡県糸島郡平原弥生古墳調査概報』福岡県文化財調査報告書第33集
北條芳隆2017『古墳の方位と太陽』同成社
南健太郎2019「平原遺跡１号墓出土鏡の評価」『東アジアの銅鏡と弥生社会』同成社
柳田康雄2000「平原王墓出土銅鏡の観察総括」『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
柳田康雄2002『九州弥生文化の研究』学生社
柳田康雄2015「１・２世紀の磨滅鏡・踏み返し鏡・仿製鏡」『古文化談叢』74
柳田康雄・角浩行編2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
渡辺正気1998「解説」『実在した神話〈解説付新装版〉』学生社

第8図　日向峠からの日の出（2012.10.20撮影）

［基調講演１］

# 平原巫女王墓とイト国が果たした役割

國學院大學博物館客員教授
柳田　康雄

## １．はじめに

伊都国の特質は、まず弥生文化の出現と深く関わっていることである。稲作の伝来ルートは、研究史的には様々であるが、弥生文化は考古学的には朝鮮半島南部と密接な関係にある。朝鮮半島南部の碁盤型支石墓は、北部九州のうち玄界灘沿岸から島原半島の弥生初期遺跡において見られるが、この内糸島地域では上石が直径２m以上のものがあり、供献土器だけではなく朝鮮半島製の磨製石鏃や装身具を副葬している。弥生早期墳墓では、石囲い木棺（柳田 2003a）墓などから遼寧式銅剣を模倣した磨製石剣ではなく、次の段階の中国（戦国）式有節柄式銅剣を模倣した有柄式磨製石剣と長身の磨製石鏃が副葬されていることから、弥生時代の始まりは紀元前 400 年頃である（柳田 1982・1983・2000b・2002 b・2004・2009・2014 a）。弥生前期土器は板付Ⅰ式土器が最古とされているが、糸島地域では弥生早期の夜臼式土器の新しい段階の小壺から文様化が始まることから、弥生前期の板付Ⅰ式古段階土器は糸島地域に集中している。次に福岡・唐津両平野に普及し、板付遺跡が板付Ⅰ式新段階から繋栄している。すなわち、板付Ⅰ式古段階土器は、北部九州の内陸部や遠賀川以東には伝わらない（柳田 2016 b・2018a）。

次に紀元前 200 年頃の弥生中期初頭になると、やはり朝鮮半島から青銅器文化が伝わり、青銅武器などが製作されるようになる。朝鮮半島系青銅武器は、玄界灘沿岸の弥生中期初頭の墳墓に副葬され、多鈕細文鏡・銅矛・銅剣・銅戈と装身具が共伴しているが、筑紫平野以南の内陸部や遠賀川以東では一時期遅れる。中期初頭の青銅器は福岡市早良平野に集中しているが、これらの青銅器の生産遺跡が現在のところ未発見であり、同時期の墳墓に使用される甕棺の分布が糸島と早良を中心としていることから、両地域のいずれかであろう。甕棺墓に使用される大型甕に伯玄式・金海式という型式があり主に金海式甕棺墓に青銅器が副葬されるが、これらの型式は北部九州の旧筑紫郡・筑紫平野以南や宗像以東には分布しない（柳田 2006・2007・2014 a・2015a）。

## ２．元始王権の出現

北部九州は、中期後半になると卓越した糸島市三雲南小路王墓（柳田 1983・1985）・春日市須玖岡本王墓の存在から、「イト」と「ナ」の地域には非公式に中国の冊封体制に組み込まれた「国」が形成されたものと考え、首長墓にも６段階以上のランクが成立している。（柳田 2000 b・2002 a・2003 b・2008a・2012・2013・2014a・2015a）。

これに対して以東の青銅武器が中期末以後流入する中国・四国地方は、北部九州のように首長個人の所有物とはならず、共同体の共有物として弥生後期に出現する銅鐸と同じように埋納され、武器形祭器と同様な扱いを受けている。その埋納という儀式も、北部九州周辺部の影響で銅鏡流入後の中期末に突然開始される（柳田 1985b・2006・2007・2008a・2023b・2024・2025a・b）。

弥生王墓とは、①他の集団墓から独立した一定規模の墳丘をもつ特定個人墓、②隔絶した内容の副葬品をもち、なかんずく大型・中型鏡を含むこと、③王墓とされる背景として王が存在する証明があること（「世々王有り」、「漢委奴國王」金印の下賜などがある）の３点が条件となる。三雲南小路王墓のように副葬品中に中国皇帝から下賜された金銅四葉座飾金具やガラス璧などの葬具を含めば朝貢していた証明ともなる（柳田 1983・1985a・b・1994・2000 b・2002 a・2008a）。

朝鮮半島には当該期に大型鏡・中型鏡や璧などの葬具が出土していないことも知られており、前漢王

弥生時代が500年遡るという説は日本考古学では証明できない

| 中国 | 年代 | 韓国 | | 時代 | 時期 | 北部九州編年 | | 近畿編年 | 伊都国関係 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 春秋 770-453 | | | 可楽里式<br>欣岩里式 | 縄文 | 晩期 | 縄文時代<br>黒川式 | | 縄文時代 | |
| 戦国 | 400- | 無文土器時代 | 先松菊里<br>松菊里式 | 弥生時代 | 早期 | 夜臼式 | 1<br>2 | 滋賀里Ⅳ式 | 曲り田遺跡<br>長野宮ノ前・志登・新町支石墓群<br>井田用会・三雲加賀石・石ヶ崎支石墓 |
| | 300- | | | | 前期 | 板付Ⅰ式 | 1<br>2 | 船橋式 | 三雲加賀石甕棺墓群 |
| 221- | | | 水石里式 | | | 板付Ⅱ式 | 1<br>2<br>3 | 長原式 | 三雲加賀石住居群<br>三雲石橋甕棺群 |
| 秦 202- | 200- | | | | 中期 | Ⅰ | 1<br>2 | 第Ⅰ様式 | 三雲柿木墳墓群<br>戦国式鏡・中国式銅剣・韓式銅剣の流入 |
| 前漢 | 100- | | 勒島式 | | | Ⅱ | 1<br>2 | | |
| | | | | | | Ⅲ | 1<br>2 | 第Ⅱ様式 | 前漢鏡を多量輸入<br>三雲南小路王墓<br>漢の外臣となる<br>本格的東漸開始 |
| 8- | B.C.<br>A.D. | | | | | | | | |
| 新 25- | | | 原三国時代 | | 後期 | (高三潴式) | 1<br>2<br>3<br>4 | 第Ⅲ様式<br>第Ⅳ様式 | 平原5号墓 瀬戸内以東に高地性集落出現<br>井原鑓溝王墓<br>井原ヤリミゾ墳墓群～<br>107年イト倭国王朝貢<br>57年「漢委奴国王」の金印拝受 |
| 後漢 | 100- | | | | | (下大隈式) | 5 | 第Ⅴ様式 | 平原巫女王墓<br>ヤマトに遷都 |
| 220- | 200- | | | 古墳時代 | 早期 | 西新式 Ⅰa Ⅰb | | 庄内式 | 1<br>2 | 卑弥呼<br>潤神社古墳・津和崎権現古墳<br>稲葉・泊大塚・御道具山古墳 |
| 三国 265- | | | | | 前期 | Ⅱa | | 布留式 | 1 | 泊大日山・三雲端山・若八幡宮古墳 |
| 西晋 281-316- | 300- | | 三国時代 | | | Ⅱb | | | 2 | 一貴山銚子塚古墳<br>三雲築山古墳 |
| 五胡 東晋 | | | | | | Ⅱc | | | 3 | 鋤崎古墳・釜塚・長嶽山古墳群<br>丸隈山古墳・兜塚古墳 |
| | 400- | | | | | Ⅲa | | | | 井田原開古墳・今宿・周船寺古墳群 |

弥生先進文化が本州・四国に伝播するには200年かかっている

表1 北部九州の青銅器からみた土器編年・年代とイト国関係遺跡群（柳田2024a・b）

朝からの径 20㎝以上の大型鏡・中型鏡・葬具の下賜は、中国の外臣と認知された証拠（岡村 1999、柳田 1983・2002 a・2008）であり、「イト国」と「ナ国」に元始王権が出現していたものと考えている（柳田 1983・1985a・b・2008・2010・2011・2013）。

## 3. 銅鏡序列の形成

北部九州の首長層のランクを整理しておきたい。中期後半の首長墓の副葬品を見る限りは、多量の前漢鏡群と青銅武器・装身具などで構成されている。これを大分類すると、①三種の多量の前漢鏡と青銅武器・玉類をもつもの、②三種の複数の前漢鏡と武器・装身具をもつもの、③小型前漢鏡１面と武器をもつもの、④武器と装身具をもつもの、⑤鉄製武器のみをもつもの、⑥イモガイ製貝輪をもつものの６段階に区分できる。さらに、前漢鏡の中でも、超特大型・特大型鏡・中型鏡・小型鏡のランクが明らかであること、青銅武器に拘泥する王とオウをはじめ、武器の数、装身具の違い、貝輪のゴホウラとイモガイの違いなどでも小分類できる。

このように首長層の重層化、祭祀の多様化によって、ランクに応じた威信財の必要性に迫られた結果が青銅武器・ガラス製品・貝輪・創作青銅器・小形仿製鏡・大型・中型仿製鏡などの製作が統制された管理の下に専業生産されたともいえる。それはあたかも中国の冊封体制を模した威信財製作であり、分配システムといえる（図 1, 柳田 2008・2010）。

弥生時代イト国を考古学的にいかに評価できているか、それを計る尺度の一つが、「漢委奴国王」金印の解釈であると考えている。「倭奴国」を福岡平野の「奴国」と考える考古学研究者（高倉 1995、岡村 1999、寺沢 2000・2021 など）は、基礎学力が優れていながら、土器編年・銅鏡・青銅器等の製作技術を含めた考古学的基礎研究不足と考えるからだ（柳田 2000a・b・2007b・2008・2010・2013）。紀元後の１世紀以後の福岡平野には、イト国と比較するまでもなく、後漢鏡副葬墓が著しく少ない。1965 年に平原王墓が発見されてからも、平原王墓を古墳時代として、弥生研究の俎上に載せない近畿中心史観が存在（佐原 1987）し、現在も潜在的に存続している。

反面筆者からみてイト国理解の最先端に存在する寺沢薫は、「「イト」倭国」を提唱している（寺沢 2014・2021）。浅学な筆者は寺沢の理論的国家論には追随できないが、考古学的基礎研究の蓄積から

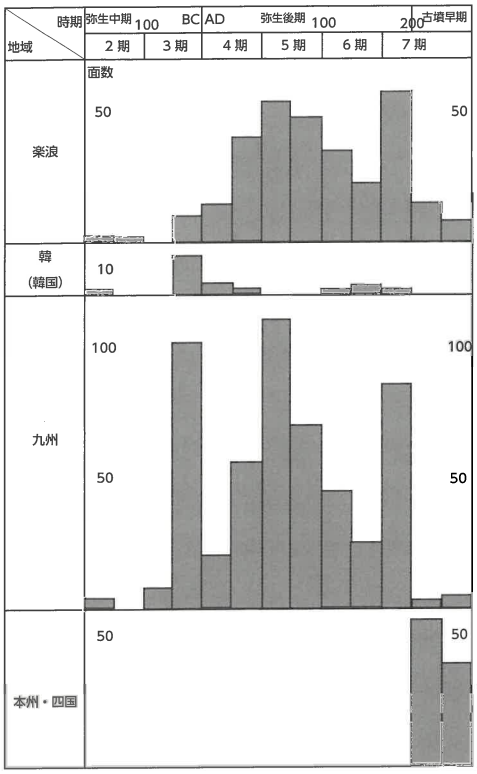
議論是正できるものと考えている。少なくとも、イト国を弥生時代最高の国家群として認めていることは評価しており、筆者も「イト倭国」という名称で継承している（柳田 2013）。ところが、北部九州原産青銅祭器の東方拡散が示すように、単なる「部族的国家」（寺沢 2014・2021）ではないと考えている。何故なら、後漢の冊封体制下にある「イト倭国」とそれまで栄えていた近畿拠点集落（唐古・鍵遺跡等）が衰え、奈良県桜井市に突如として出現した初期纒向遺跡群と共に金印を下賜されているイト倭国の王都三雲・井原遺跡群との違いに格差が存在するのだろうか。

図３は、弥生王権出現後の弥生後期（１・２世紀）の首長層の社会構造概念図である（柳田 2015b・2016a）。前述したように、「漢委奴国王」金印は、「イト国王」或いは「ワド国王」に下賜され、中国後漢王朝の冊封体制に組み込まれ、外臣として倭国王と承認されたと考えるからである。金印と同時に下賜されたであろう後漢鏡は、イト国を中心に分布し、在地でも製作している（柳田 2015b）。考古学的基礎研究に熱心ではない（理論考古学）研究者は、弥生超特大型・特大型・大型・中型複製鏡や仿製鏡を認めないが、寺沢は平原巫女王墓出土超特大型内行花文八葉鏡５面を当初は仿製鏡と認めなかったが、（寺沢 2000 ～ 2014）、最近では「倭製連弧文鏡」と認めるようになった（寺沢 2021）。平原巫女王墓が保有する多量の銅鏡の大半を仿製鏡とする筆者は（柳田 2000a・b・2002a・b）、紀元前からの倭国の青銅器鋳造技術（柳田 2008b・2009・2017a）、２世紀後半の後漢の動乱と「倭国乱」を承知しているからである。２世紀末（弥生終末）までの時点で、近畿中心部の大阪府・奈良県に完形後漢鏡が流入していない事実が存在する（柳田 2007・2008b・2023a）。後漢鏡や三国鏡が近畿地方で出土するのは、ホケノ山古墳など纒向型古墳といわれる早期古墳以後である。それ以前に、大型墓坑（木槨）を備えた刳抜式木棺（「割竹式木棺」）の主体部に銅鏡を副葬・供献する儀礼を継承しているのはイト倭国であり、近畿地方に存在しなかった葬送儀礼である（柳田 1992・2007・2008b・2010・2013・20014c・2023a）。

2015 年拙稿の「首長層の社会構造概念図」（図３）は、57 年に後漢王朝を背景とした冊封体制に組み込まれた倭国王を頂点として、倭国王が金印と大型後漢鏡（特大型仿製鏡を含む）を専有し、以下５・６層の中間首長層に中型・小型鏡その他の威信材青銅器を分配する構図である（柳田 2007）。威信材とは別に存在する青銅祭器は、地域共同体で共有され、共同体で管理される。青銅祭器にもランクがあり、青銅武器にランクが存在したように武器形祭器にも継承され、銅矛を頂点としたランクが形成されている（柳田 2007・2008b・2012）。

別に近畿を中心に分布するとされる銅鐸は、山陰出雲の神庭荒神谷遺跡でのみ中期末以後の銅矛と共伴するが、その他の中国地方では２番ランクの銅剣と共伴し、近畿地方以東になると銅矛・銅剣が伝わ

第1図　三雲南小路王墓３号鏡と同笵鏡の泉屋博古館蔵１号鏡(柳田1983・1985)(柳田実測・撮影)




第2図　岡村秀典(1991)の「図21漢鏡出土数の変遷」を改変(柳田2025『纒向学研究』14)

らず、銅鐸が3番ランクの銅戈と共伴するにすぎない。すなわち、銅鐸が武器形祭器と共伴する場合は武器形祭器が東漸するほどランクが低下することになる構図である。したがって、イト倭国と比較するまでもなく、本州・四国には弥生後期に王権が単独で出現する母体が存在しないことになる。

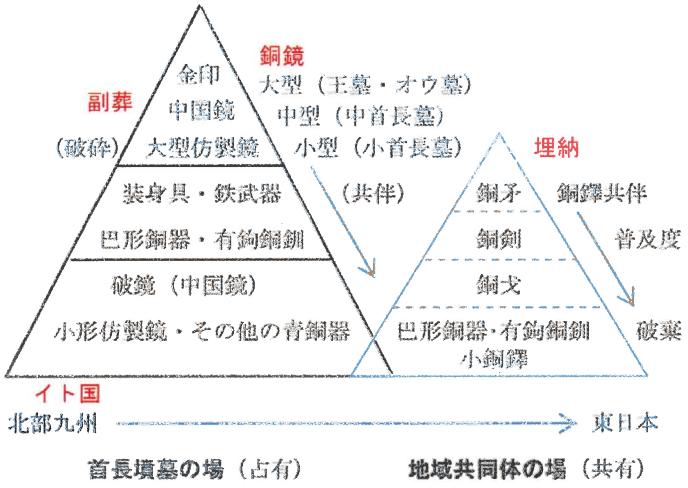
107年に朝貢した「倭国王帥升」は、卑弥呼の30人より多い「生口」160人を献上していながら、金印が新たに下賜されなかった理由が存在するはずである。朝貢時にすでに「倭国王」を名乗り、それが承認されていたからであり、57年朝貢「倭奴国王」の後継者と後漢王朝が承認していたからに相違ない。もし、一般的に考えられているように、覇権がナ国王からイト国王に交代していたとすれば、新たな金印が下賜されなければならない。イト国は、三雲南小路王墓出現以後「イト倭国」が継承されているのである。107年「倭国王帥升」を井原鑓溝王墓や銅鏡を保有しない岡山県楯築墳丘墓に比定する説が横行しているが、これらこそ年代的考古学基礎研究不足であり論外である。

## 4. 青銅器（銅鏡）の鋳造技術

筑前町東小田峯遺跡や春日市須玖タカウタ遺跡のような青銅器土製鋳型鋳造技術では、原型が存在すれば複製青銅器が多数製造できる（柳田2009・2017a・2023b）。両遺跡の時期は弥生中期前半古段階（紀元前2世紀前半）であり、その鋳造技術は前漢銅鏡の鋳造技術を模倣し、その後も中期末の中型前漢鏡の同笵鏡（図1、1983・1985a）、後期前半の井原ヤリミゾ鏡等の中型・大型銅鏡や巴型銅器・有鈎銅釧などを製作している（柳田2017a）。平原巫女王墓では、40面の内に同笵鏡7組19面が含まれることなど、超特大型内行花文八葉文鏡5面、特大型「大宜子孫」銘内行花文鏡、大型・中型方格規矩四神鏡を仿製鏡としている（柳田2000a・b）。銅鏡研究者の多くは、銅鏡の研磨技術やマメツ鏡と複製鏡（踏み返し鏡）の区別ができないことから、超特大型・特大型・大型・中型仿製鏡の存在を認めない。これは近畿中心史観が邪魔して、北部九州の弥生時代に中型以上の仿製鏡（倭鏡）が存在することを意図的に認めないにすぎないと考える（2025a·b）。また、岡村秀典（1999）は、本州・四国の前期古墳から出土する漢鏡を弥生時代からの伝世鏡とし、山陰・瀬戸内には楽浪郡から直接流入したとする。ところが、本州・四国の古墳出土漢鏡は著しくマメツしている。これに反して玄界灘沿岸の漢鏡は伝世マメツしていない。したがって、本州・四国の伝世鏡は、イト倭国経由であると考えている（図2、柳田2025a・b）。寺沢薫（2014）も、舶載青銅製品の東方流入はⅣ様式（柳田の後期中頃）以後と考えている。事実として、近畿中央部では、未だに弥生時代遺跡から完形鏡が発見されていない。

## 5. イト国王は倭国王

後漢の光武帝から57年に下賜された「漢委奴國王」の金印は、通説では福岡平野の「奴国」王に下賜されたものとされている(高倉1995)。ところが、考古学的にはイト国やナ国などの地域論を含めた基礎研究不足で、ナ国がイト国の上位にランクされる根拠が証明されていない。金印の銘文を「漢委奴國王（かんのわどこくおう）」と読み、「奴」を中国の北方民族の「匈奴（きょうど）」の場合と同じように卑称と考えると「委奴國王」は倭国王と理解することができる。考古学的には、福岡平野は前記したように後漢鏡の出土が糸島平野に劣っている。福岡




第3図　弥生時代後期(１・２世紀)の首長層の社会構造概念図(柳田2015b)

平野は、弥生中期から後期の青銅器の生産量において、その他の地域の追随を許さないほど膨大なものであるが、紀元前１世紀後半の中期後半以後は福岡平野生産の武器形青銅器を抑えて銅鏡が最高位の威信財となる。イト国は、弥生中期・後期を通して銅鏡の出土量において他の地域の追随を許さない。したがって、107 年の朝貢では「倭國王」と名乗り、後漢王朝も生口を 160 人も献上した「帥升」を「倭奴國王」の後継者と認め、改めて金印が下賜されなかったのである（図 3）（柳田 2010・2013・2015 a）。

当時の倭国の範囲は、「北部九州を中心とした範囲」（辻田 2023）と考える研究者がいるが、それは紀元前元始王権が誕生した当初の時期である。辻田淳一郎氏は、57 年遣使を奴国、107 年遣使を伊都国と考えていることから、原点から設定に齟齬がある。そもそも井原鑓溝王墓の時期に誤認があり、漢鏡と巴型銅器の時期が１世紀前半以前（弥生後期前半）である。

## 6. 平原巫女王墓の実態

拙稿では、「平原巫女王墓」の名称を初回伊都国フォーラム「伊都国女王と卑弥呼」以来使用している（柳田 2015a）。にもかかわらず、第９回伊都国フォーラムになっても「平原王墓」名が使用されているように、その実態が理解されていないのが実情である。初回フォーラムは、平原遺跡が発掘調査されて 50 周年記念であることから、古代祭祀研究の権威である穂積裕昌・辰巳和弘・石野博信・寺沢知子の四氏が近畿から参加され筆者と討論した経緯があり、それからさらに 10 年が経過している。平原遺跡を最初に紹介した原田大六氏においてもその著書『実在した神話』が示すように、その遺跡の位置と太陽信仰に関する発見に功績がある（原田 1966）。しがって、筆者も参考文献に示すように再三平原遺跡の性質・実態を述べていることから、ここでは紙数の関係から平原巫女王墓の特質をまとめて箇条書きとするにとどめる。

**墳墓立地の地形的位置**―副葬品は弥生王墓級最高でありながら、王都から隔絶したイト倭国王都を俯瞰できる尾根線や東斜面ではなく、俯瞰できない反対側の低丘陵西斜面に位置する。その地点は、高祖丘陵尾根線から昇る太陽（日の出）信仰とその位置観測に最適な地点が選ばれている（原田 1966, 柳田 2014c）。

**年代**―弥生終末墳丘墓墳丘への入口の位置、土器・鉄器・耳璫・超特大型内行花文八葉文鏡５面の製作技術が時期を決定づけている（柳田 2000a・b・2002a・b・2008a）。

**墓坑・木棺型式**―大きな墓坑に木槨・割竹式木棺を備え、奈良県ホケノ山古墳が継承している。

**被葬者**―三雲南小路王墓２号棺のような女王級（王族）の巫女（卑弥呼の近親）で、男王墓と一般巫女墓は三雲・井原遺跡群（井原ヤリミゾ墳墓群）に所在する（柳田 2015b）。

**弥生最大・最多の仿製鏡（倭鏡）の保有**―弥生時代に世界最大円形超特大型・特大型・大型・中型仿製鏡の存在を最初に認知させ（柳田 2000a）、特大型銅鏡以下が古墳前期大和天神山古墳や全長 200m 規模の大王級桜井茶臼山古墳鏡にも継承される（岡林他 2025、柳田 2025a・b）。

**完形鏡副葬・破砕鏡供献**―漢鏡４期虺龍文鏡（伝世）、漢鏡４～６期の複製鏡・仿製鏡、後漢末（弥生終末）相当の鋳造・研磨技術の超特大型内行花文八葉文鏡５面を保有。桜井市ホケノ山古墳・桜井茶臼山古墳が継承している。

**時期が異なる銅鏡の副葬**―三雲南小路王墓・須玖岡本王墓・井原鑓溝王墓以来の伝統で、古墳時代の福岡県一貴山銚子塚古墳・奈良県ホケノ山古墳・大和天神山古墳・桜井茶臼山古墳・富雄丸山古墳などの前期大王級古墳にも継承されている銅鏡副葬儀礼で

ある（柳田 1983・1985・2000a・b・2003b・2007・2008・2010・2013・2014c・2016a・b・2019a・b・2023a・2025a・b）。

**墓坑周辺の立柱・柵列の存在**―大王級桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳が継承している（柳田 2000a・b、東影 2025）。

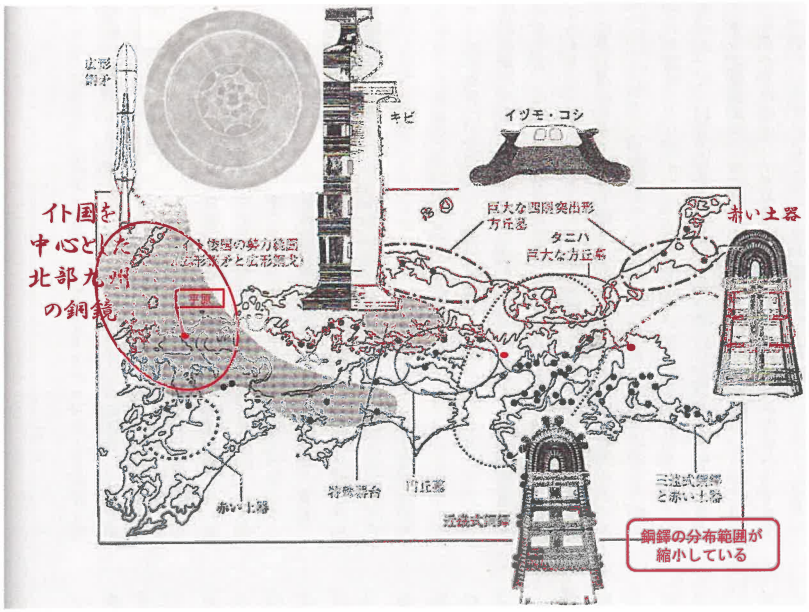
**大柱と鳥居状双柱**―長野県諏訪大社（一宮・二宮）に立てられる大柱規模で、別に一の双柱が日向峠、二の双柱が高祖山山頂、三の双柱が雷山頂上を仰ぐ方向に備えられている。

**平原５号墓の存在意義**―平原墳墓群の初葬時期が三雲南小路２号棺（巫女王墓）直後の後期初頭であること。

## 7. 遷都と古墳の出現

北部九州の創作青銅祭器（柳田 1986b）である巴型銅器・有鈎銅釧は、弥生終末・古墳早期までに関東地方東端部まで拡散している（柳田 2012）。この範囲を「魏志倭人伝」でいう「倭国」の範囲と考えている（図４，柳田 2007・2013）。イト倭国の銅鏡・青銅武器・青銅祭器は、弥生中期末以後東漸を始め、最初に日本海側に青銅器に伴う須玖式の赤い土器が拡散し、後期後半には東海地方にも達する（柳田 2013）。関東まで拡大したイト倭国は、その王都が西端では統治に支障を来たし、その版図の中央部に遷都せざるを得なくなった。これが結果的に２世紀後半の「倭国乱」と「卑弥呼共立」で終

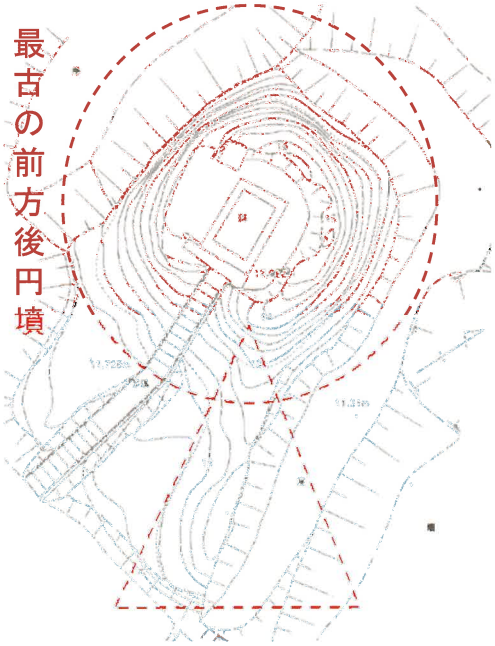
第4図　北部九州系青銅器分布図（柳田2012）に写真を追加（柳田撮影制作）（柳田2016・2023a・b）

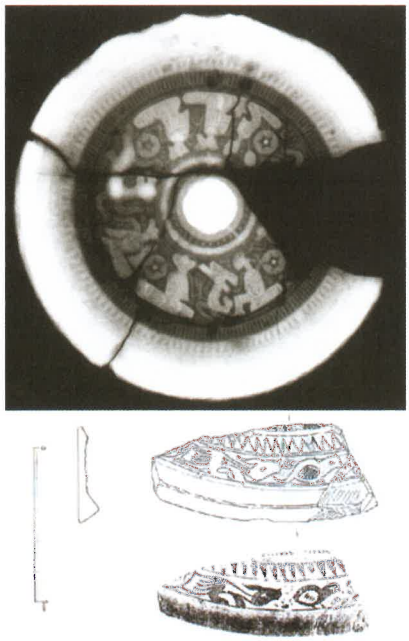



第5図　「倭国乱」の頃の地域勢力のシンボルと第２次高地性集落（寺沢薫2011に加筆）（柳田2015a・2023a・b）

息する（柳田 2007·2013）。弥生終末に銅鏡最大·最多を誇る平原巫女王墓がイト国に実在することで証明している。高地性集落の時期からは、倭国乱が最終的に近畿地方で収束していることが明らかである（図５，寺沢 2011、柳田 2015a · 2023a · c）。

糸島市津和崎権現古墳のような出現期の古墳には、２世紀末～３世紀前半の「上方作」銘獣帯鏡や画象鏡などが副葬されている（柳田 2019a · 2023a · c）。初期の古墳には、次の３世紀前半に画文帯神獣鏡、３世紀中頃に三角縁神獣鏡が加わるとされている（岡村 1999、森下 2007）。近畿中心史観の岡村秀典 · 森下章司両氏は、画文帯神獣鏡以前を副葬する墳墓を古墳と認めず弥生墳丘墓とするが、方形墳や円形墳の一方に①突出部が出現し、尚且つ②イト倭国が継承してきた銅鏡が副葬され、それが③汎日本的に分布すれば、当該地では前時代墳墓と画期的に改革された墳墓葬送儀礼（北部九州の柩前首長権継承儀礼）の拡散であることから古墳時代とすべきである（柳田 1983 · 1985 · 2000 · 2003b · 2007 · 2008 · 2010 · 2013 · 2014c ·



参考図　みやこ町徳永川の上 画像鏡（復元径22cm）（柳田1996）

第6図　糸島市志摩津和崎権現古墳（全長40m）と画象鏡（径16.1cm）

第7図　津和崎権現古墳画象鏡（漢鏡７期１段階）（伊都国歴史博物館蔵）３世紀初頭

2016·2019a·b·2023a)。3世紀初頭までの「上方作」銘鏡などは、関東にまで分布するものの著しくマメツしている。ところが、北部九州で出土する漢鏡7期第1段階鏡は、唐津市中原ST13415古墳例・津和崎権現古墳例（図6・7）・小郡市津古生掛古墳例のように伝世マメツしていないことから、イト倭国が直接入手しそれが東漸するにしたがいマメツするものと考えている（図2、柳田2025a·b)。漢鏡7期前半鏡は、墳丘形態が不明確な糸島市泊一区古墳（斜縁獣帯鏡）・同大日山古墳（仿製大型神獣鏡2面)、福岡市五島山古墳（斜縁獣帯鏡2面)、同野方中原1号墳（獣帯鏡破鏡)、大牟田市潜塚古墳（画象鏡）からも出土している。これらは福岡市宮の前古墳のように報告書（1971）段階では楕円形墳墓であったが、拙稿（1986a・1987b）の指摘後突出部をもつ古墳として認められたように、前方部が未発達な前方後円墳や前方後方墳であろう。今日では、宮の前古墳と中原ST13415古墳出土土器は同型式の西新式土器(庄内式土器古段階併行)であり、拙稿土器編年では古墳早期前半としている(柳田1991)。


【参考文献】
岡林孝作・東影　悠編　2025『桜井茶臼山古墳の研究―再調査と出土遺物再整理―』奈良県立橿原考古学研究所・一般財団法人橿原考古文化財団
岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55
岡村秀典　1999「三角縁神獣鏡の時代」『歴史文化ライブラリー 66』吉川弘文館
佐原　眞　1987「日本人の誕生」『大系日本の歴史』1　小学館
沢　君臣・下條信行　1971『宮の前遺跡〈A～D地点〉』福岡県労働者住宅生活協同組合
設楽博己　2013「東日本の弥生時代社会」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
高倉洋彰　1995『金印国家群の時代　東アジア世界と弥生社会』青木書店
辻田淳一郎　2023「副葬品からみた伊都国王の実像」『第6回伊都国フォーラム　伊都国王がみた世界―弥生時代の王権・外交・生産―』糸島市
寺沢　薫　2000『日本の歴史02　王権誕生』講談社
寺沢　薫　2011『王権と都市の形成史論』吉川弘文館
寺沢　薫　2014『弥生時代の年代と交流』吉川弘文館
寺沢　薫　2021『弥生国家論―国家はこうして生まれた―』敬文社
原田大六　1966『実在した神話』学生社
東影　悠　「桜井茶臼山古墳の「丸太垣」とメスリ山古墳の「方形埴輪列」」『桜井茶臼山の研究―再調査と出土遺物再整理―』奈良県立橿原考古学研究所・一般財団法人橿原考古文化財団
森下章司　2007「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』54-2　考古学研究会
柳田康雄編　1980「三雲遺跡Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』58
柳田康雄　1982「原始」『甘木市史』甘木市
柳田康雄　1983「伊都国の考古学―対外交渉のはじまり―」『九州歴史資料館開館10周年記念大宰府古文化論叢』吉川弘文館
柳田康雄編　1985a「三雲遺跡南小路地区編」『福岡県文化財調査報告書』69
柳田康雄　1985b「発掘された「倭人伝」の国々」森浩一編『日本の古代1倭人の登場』中央公論社
柳田康雄　1986a「北部九州の古墳時代」森浩一編『日本の古代5前方後円墳の世紀』中央公論社
柳田康雄　1986b「青銅器の仿製と終焉」『九州考古学』60　九州考古学会
柳田康雄　1987a「九州地方の弥生土器2高三潴と西新町式土器」金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究4弥生土器Ⅱ』雄山閣
柳田康雄　1987b「北部九州の出現期古墳とその背景」『東アジアの古代文化』52　大和書房
柳田康雄　1991「土師器の編年―九州―」『古墳時代の研究』6　雄山閣
柳田康雄　1992「朝鮮半島の倭系遺物の解釈」『東アジアの古代文化』73　大和書房
柳田康雄　1996「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』7　福岡県教育委員会
柳田康雄　2000a「平原遺跡」『前原市文化財調査報告書』70
柳田康雄　2000b『伊都国を掘る』大和書房
柳田康雄　2002a『九州弥生文化の研究』学生社
柳田康雄　2002b「摩滅鏡と踏返し鏡」『九州歴史資料館研究論集』27
柳田康雄　2003a「伯玄社遺跡―「ナ国」の甕棺編年」「弥生木棺墓」『春日市文化財調査報告書』35　春日市教育委員会
柳田康雄　2003b「「イト国から邪馬台国へ」『東アジアの古代文化』115　大和書房
柳田康雄　2004「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』29
柳田康雄　2005「銅鏡鋳造における湯口について」『鏡笵研究』Ⅲ　奈良県立橿原考古学研究所
柳田康雄　2006「中国地方の青銅武器」『喜谷美宣先生古稀記念論集』
柳田康雄　2007「卑弥呼を共立したクニグニ」『季刊考古学』100　雄山閣
柳田康雄　2008a「弥生ガラスの考古学」『九州と東アジアの考古学―九州大学考古学研究室50周年記念論文集―』上巻
柳田康雄　2008b「弥生時代の手工業生産と王権」『國學院雑誌』109-11
柳田康雄　2009「弥生時代青銅器土製鋳型研究序論」『國學院雑誌』110-6
柳田康雄　2010「弥生王権の東漸」『日本基層文化論叢　椙山林継先生古稀記念論集』雄山閣
柳田康雄　2011「青銅器とガラス製品の生産と流通」『講座日本の考古学5弥生時代上』青木書店
柳田康雄編著　2012『東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究』雄山閣
柳田康雄　2013「弥生時代王権論」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
柳田康雄　2014a『日本・朝鮮半島の青銅武器研究』雄山閣
柳田康雄　2014b「弥生青銅器製作技術からみた東西の併行関係」『アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』8
柳田康雄　2014c「考古学よりみた卑弥呼の鬼道」鈴木克彦編『シャマニズムの淵源を探る』弘前学院大学地域総合文化研究所
柳田康雄　2015a「伊都国王墓が語るわが国の誕生―伊都国女王の出現と平原巫女王墓の存在意義―」『伊都国フォーラム　伊都国から日本の古代を考える　伊都国女王と卑弥呼―王権誕生の軌跡を追う―』糸島市教育委員会
柳田康雄　2015b「1・2世紀の摩滅鏡・踏み返し鏡・仿製鏡」『古文化談叢』74
柳田康雄　2016a「国家形成期における伊都国が果たした役割―銅鏡にまつわる風習はイト国からヤマトへ―」『第2回伊都国フォーラム倭国誕生―伊都国から邪馬台国へ―』糸島市教育委員会
柳田康雄　2016b「弥生王権論―イト国からヤマト国へ―」『平原遺跡出土品国宝指定10周年記念事業伊都国歴史博物館秋季特別展　王の鏡～平原王墓とその時代～』
柳田康雄　2017a「福岡県春日市須玖タカウタ遺跡の青銅器鋳造技術」『古文化談叢』79
柳田康雄　2017b「卑弥呼以前の伊都国の外交」『桜井市纒向学研究センター東京フォーラム「卑弥呼」発見親魏倭王卑弥呼に制詔す―卑弥呼の外交―』奈良県桜井市
柳田康雄　2018a「弥生時代初期の時期区分と初期青銅器」『纒向学研究』6
柳田康雄　2018b「伊都国の外交」『第4回伊都国フォーラム　三雲・井原遺跡国史跡指定記念シンポジュウム　伊都国人と文字』糸島市教育委員会
柳田康雄　2019a「イト国からヤマトへ」『第12回纒向学セミナー』桜井市纒向学研究センター
柳田康雄　2019b「弥生時代王権論(補足)」『季刊邪馬台国』137　梓書院
柳田康雄　2020「倭国における方形板石硯と研石の出現年代と製作技術」『纒向学研究』8
柳田康雄　2023a「イト国からヤマトへ」桜井市纒向学研究センター編『纒向学からの発信　纒向遺跡から14人のメッセージ』大和書房
柳田康雄　2023b「弥生青銅器生産」『弥生文化博物館研究報告』8
柳田康雄　2023c「福岡県糸島市上鑵子遺跡出土弥生土器毛筆彩色絵画発見」『令和5年度九州考古学会総会研究発表資料集』
柳田康雄　2024a「玄界灘沿岸地域の外来系土器の年代と以東の併行関係」『令和5年度纒向学研究会発表資料集』
柳田康雄　2024b「玄界灘沿岸地域の外来系土器の年代と以東の併行関係」『纒向学研究』12　桜井市纒向学研究センター
柳田康雄　2025a「弥生絵画世界―新発見資料紹介を兼ねて―」『令和6年度纒向学研究センター定例研究集会(第11回)発表資料』桜井市纒向学研究センター
柳田康雄　2025b「弥生絵画世界―新発見資料紹介を兼ねて―」『纒向学研究』14　桜井市纒向学研究センター
柳田康雄　2026a「平原巫女王墓鏡と桜井茶臼山古墳鏡」『令和8年度纒向学研究センター定例研究集会発表資料』桜井市纒向学研究センター
柳田康雄　2026b「中国鏡と平原巫女王墓鏡・桜井茶臼山古墳鏡の比較研究」『纒向学研究』15　桜井市纒向学研究センター

[基調講演2]

# ユーラシア的視点から見た平原王墓出土ガラス玉類の国際性

奈良文化財研究所 主任研究員
田村　朋美



## 1. はじめに

平原１号墓からは、勾玉や管玉、小玉や連珠、そして耳璫など様々なガラス製遺物が大量に出土しており、平原１号墓の副葬品の重要な位置を占めている（平原弥生古墳調査報告書編集委員会 1991、柳田・角編 2000）。

日本列島にガラスが初めて出現するのは、弥生時代中期初頭の北部九州である。その後、弥生時代から古墳時代にかけて多量のガラス製品が流通した。これらの大半は平原１号墓で出土しているような玉類である。一方、日本列島で原料からガラスそのものの生産が始まったのは、飛鳥時代の７世紀後半のことであり、それ以前に流通したガラス玉は、日本列島外から製品として輸入されたもの、あるいは輸入したガラス素材を加工したものであった。それでは、平原１号墓に大量に副葬されたガラス玉類はどこで作られどのようなルートで流入したのであろうか。

ガラス玉の生産地を明らかにするためには、形態的特徴に基づく考古学的な研究だけでなく、分析化学的な研究が不可欠である。本稿では、平原１号墓から出土したガラス製の玉類について取り上げ、分析化学的手法により明らかになってきたガラスの生産地研究の現状から、平原王墓出土ガラス玉類の国際性について考察してみたい。

## 2. ガラス玉の化学分析

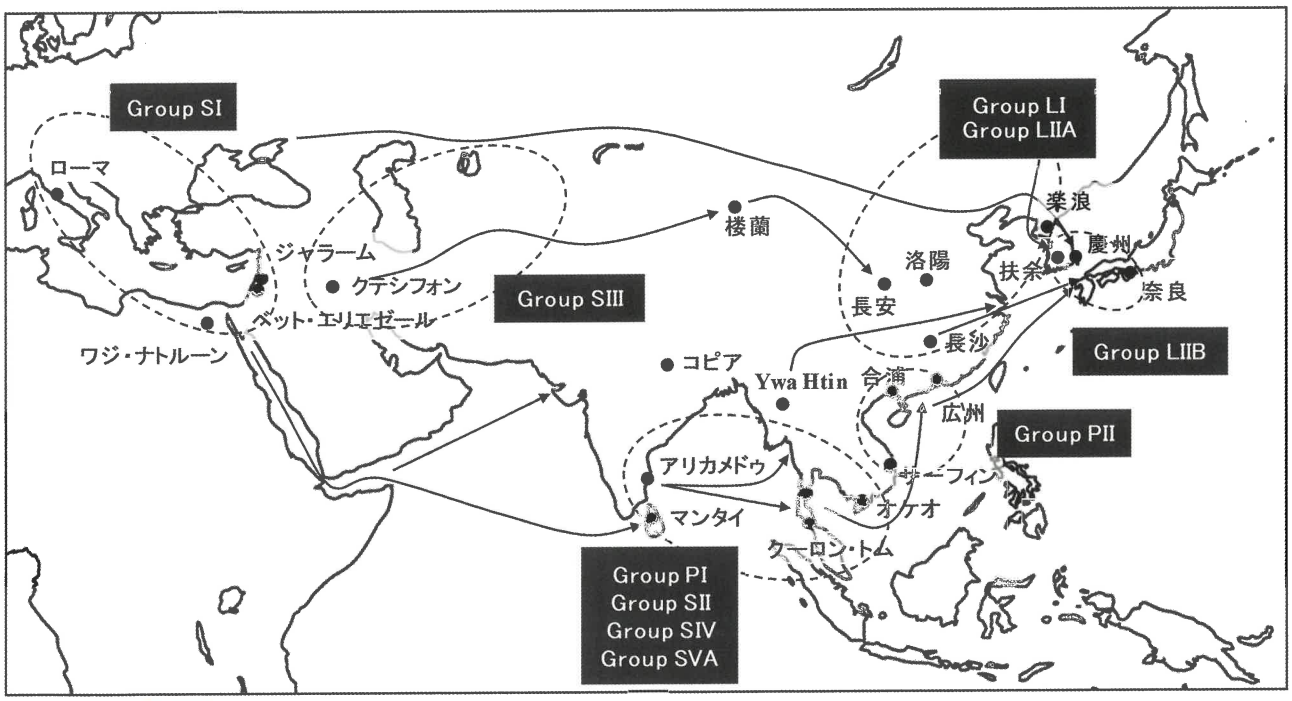
ガラスの化学組成は原料の選択によって決まる。ガラスの原料が二酸化ケイ素（$SiO_2$）であることはよく知られているが、それを自然界から得る方法には、石英分の多い砂（珪砂：海岸の砂など）を利用する方法や、石英の結晶を砕いて利用する方法など様々である。とくに、砂などを用いる場合、地域の自然環境によって不純物として混入する成分の種類や量が異なるため、原料によってガラスの化学組成が変わってくることは容易に予想できる。これはガラスの融点を下げる融剤、あるいはガラスに色をつけるための着色剤でも同様のことが起こりうる。つまり、分析で古代ガラスの化学組成が明らかになれば、具体的な生産地の検討が可能となる。古代ガラスの化学組成は、いわば生産地を示す指標なのである。

ガラス玉の化学組成分析には、蛍光Ｘ線分析法とよばれる、物質にＸ線を照射したときに物質から二次的に発生するＸ線のエネルギーから含まれる元素を特定する手法が最も一般的に用いられてきた。蛍光Ｘ線分析では、検量線法や理論補正法を用いることで、構成元素の含有量についても知ることが可能となっている。日本でも 1990 年代から蛍光Ｘ線分析を用いたガラス製遺物の材質分析事例が増加し、化学組成による分類が進展した。近年では、可搬型の装置も開発され、資料の持ち運びが難しい国内外の資料の分析にも威力を発揮している。

蛍光Ｘ線分析による筆者らの最新の分類では、弥生～古墳時代のガラスの化学組成は、融剤の種類によって鉛ガラス系、カリガラス系、ソーダガラス系に大別され、それぞれのガラス系はさらに２～５グループに細分される（Oga and Tamura 2013）。具体的には、鉛ガラス系は、バリウム（BaO）を含む鉛バリウムガラス（Group LI）とバリウムを含まない鉛ガラス（Group LII）に分けられる。カリガラス系は、アルミニウム（$Al_2O_3$）とカルシウム（CaO）の含有量から、Group PI と Group PII に区分される。色調と明確な相関があり、前者はコバルト着色の紺色透明のガラス小玉に、後者は銅着色の淡青色透明のガラス小玉に対応する。ソーダガラス系は多様で、$Al_2O_3$ と CaO、マグネシウム（MgO）と $K_2O$ の含有量から５種類（Group SI ～

| 材質分類 | | | 製作技法 | 着色剤 | 時期 | 推定出土量 | 推定生産地 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大別 | 細別 | | | | | | |
| 鉛ガラス | 鉛バリウム | Group LIA | 巻き付け | 銅 | B.C.3c-B.C.2c | 100± | 中国東北部 |
| | | Group LIB | 捩り巻き | 銅，銅＋漢青，漢青 | B.C.1c-A.D.2c | 2500± | 中国 |
| | | Group LIC | 包み巻き | 銅 | A.D.1c | 200± | 中国 |
| | 鉛 | Group LIIA | 巻き付け | 銅 | A.D.1c-A.D.2c | 1000± | 中国 |
| | | Group LIIB | 巻き付け | 銅，鉄 | A.D.7c- | 3000＋ | 百済→日本 |
| カリガラス | 中アルミナ | Group PI | 引き伸ばし，包み巻き，加熱貫入 | コバルト，鉄，銅＋マンガン | B.C.3c -(A.D.5c) | 80000± | インド |
| | 高アルミナ | Group PII | 引き伸ばし | 銅 | B.C.1c -(A.D.3c) | 60000＋ | ベトナム北半～中国南部 |
| ソーダガラス | ナトロン | Group SIA | 包み巻き／連珠 | コバルト | A.D.2c | 150± | 地中海周辺 |
| | | Group SIBa | 巻き付け | コバルト | early A.D.5c | 100± | 地中海周辺 |
| | | Group SIBb | 包み巻き | コバルト | early A.D.5c | 500± | 地中海周辺 |
| | | Group SIBc | 包み巻き，連珠 | コバルト | early A.D.5c | | 地中海周辺 |
| | 高アルミナ | Group SIIA | 引き伸ばし | コバルト | latter A.D.1c -(A.D.5c) | 5000± | インド 東南アジア |
| | | Group SIIB | 引き伸ばし，連珠 | 銅，銅＋マンガン，鉄，銅コロイド，酸化銅コロイド 錫酸鉛，銅＋錫酸鉛，マンガン，コバルト | A.D.4c -A.D.6c | 150000＋ | インド 東南アジア |
| | 植物灰 | Group SIIIA | 包み巻き | 鉄 | late A.D.1c | 10+ | 中央アジア～西アジア |
| | | Group SIIIB | 引き伸ばし，連珠 | コバルト，鉄 | latter A.D.5c -A.D.6c | 100000± | 中央アジア～西アジア |
| | | Group SIIIC | 変則的引き伸ばし | コバルト，銅，マンガン，錫酸鉛，銅＋錫酸鉛 | early A.D.7c | 10000± | 西アジア |
| | ナトロン主体 | Group SIV | 引き伸ばし | コバルト | A.D.2c -(A.D.5c) | 10000± | インド 東南アジア |
| | プロト高アルミナ | Group SVA | 引き伸ばし | 銅＋錫酸鉛，銅 | latter A.D.1c -A.D.2c | 5000± | インド 東南アジア |
| | | Group SVB | 連珠 | 銅 | latter A.D.2c -A.D.3c | 500± | 不明 |
| | | Group SVC | 加熱貫入 | 銅 | A.D.4c | 500＋ | 不明 |

表1 日本列島で流通した ガラスの 分類（Oga and Tamura 2013 をもとに一部改変）




第1図 日本列島へ流入したガラス玉類の生産地と流通経路（Oga and Tamura 2013 一部改変）

Group SV）に区分されるが、製作技法や流通時期によってさらに細分される（表１）。

これらの各材質グループは、基本的にはガラスの生産地と対応していると考えている。製品の流通状況を考慮して、現状では、第１図に示した地域にそれぞれの材質の生産地が存在したと考えている。

化学組成による分類が進展する一方、明確な生産地が発見されていない種類も多く、より具体的な生産地推定のためのアプローチとして、各種の同位体比分析も利用されてきた。

考古資料の産地推定を行う上で有効な分析手法として、鉛（Pb）の同位体比を利用する方法がある。鉛の同位体比は地域によって異なる値を示し、それぞれの鉱山の固有値となる。考古遺物の原料に関する産地推定の研究は、鉛鉱床あるいは産出地域の鉛同位体比との比較により原料鉛の産地を推定している。

ガラス製遺物についても、特に鉛系ガラスの産地推定において鉛同位体比分析は早くから注目されており、1980 年代には、弥生時代の鉛ガラスや鉛バリウムガラスには中国産の鉛鉱石が用いられ、古墳時代後期の鉛ガラスには朝鮮半島産の鉛鉱石が使用されていたことが明らかにされた（山崎 1987 など）。さらに、1990 年代には、奈良県飛鳥池遺跡から出土したガラスおよびガラス製作関連遺物の化学組成の調査と鉛同位体比分析がおこなわれ、７世紀後半に日本列島産の鉛鉱石を用いた国産ガラスの生産が始まったことが示された（肥塚 1995 など）。近年は、着色剤成分に由来する鉛の同位体比についてのデータの蓄積も進んでいる。

一方、筆者らは鉛含有量の少ないアルカリガラスに対して、ストロンチウム（Sr）同位体比分析による産地推定を試みている（田村 2023 など）。Sr 同位体比分析は、ガラスに含まれるカルシウムの起源に関する情報を提供することが期待されている。特に地中海世界で生産されたガラスについて、Sr 同位体比分析により原料である珪砂（ガラスの主成分である二酸化ケイ素（$SiO_2$）を多く含む砂）の起源を推定する研究が進んでいる。

日本のガラス玉研究は各種の化学分析により急速に進展した。次節以降では、近年の化学分析の成果を踏まえながら平原１号墓から出土したガラス玉の産地および流入経路についてみていこう。

## ３．平原１号墓出土のガラス玉類

平原１号墓では、主体部中央付近からガラス勾玉が３点とガラス丸玉 359 点以上が出土している。さらに、棺内頭部付近からはガラス管玉約 30 点とガラス小玉 492 点、ガラス連珠 886 点が出土している。また、棺内頭部付近からは、ガラス製の耳璫３点および瑪瑙製管玉 12 点も出土している（柳田・角 2000）。

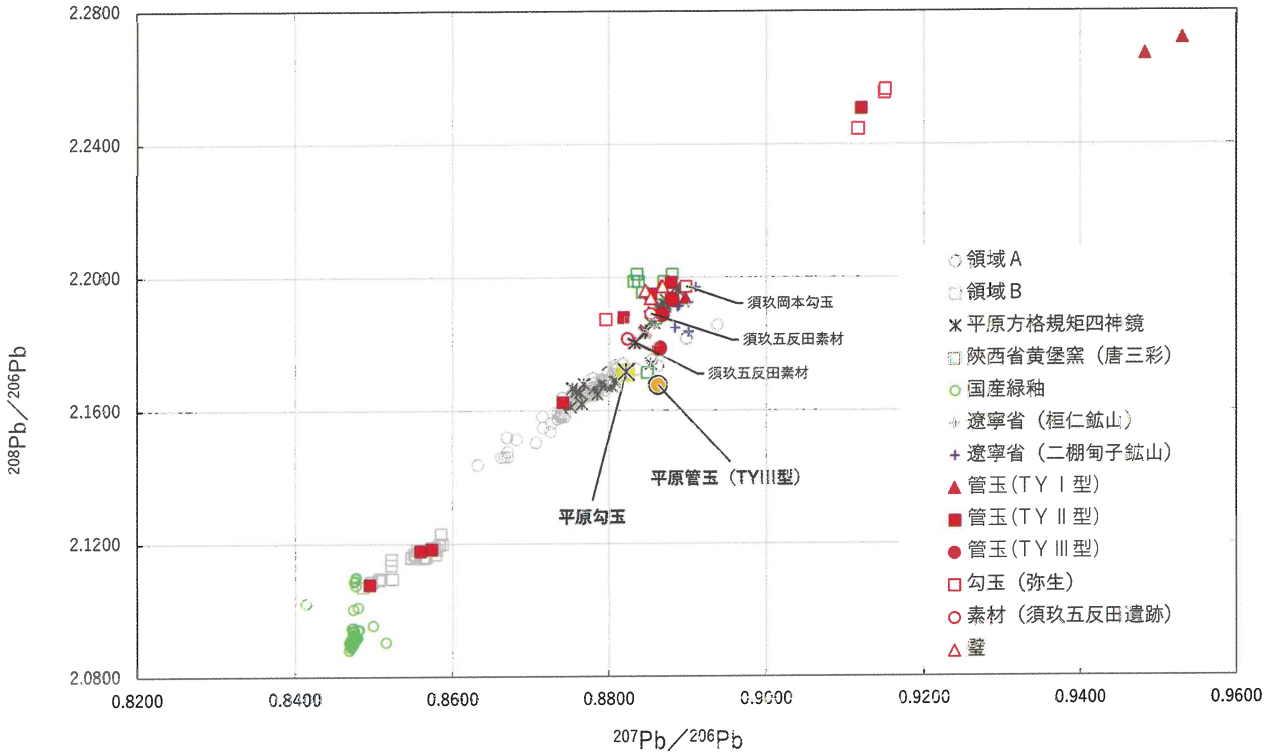
第2図　ガラス管玉（糸島市提供）

第3図　須玖五反田遺跡出土ガラス勾玉用鋳型（春日市教育委員会 1994）

（１）ガラス勾玉（第２図）

ガラス勾玉３点はいずれも頭部に四条の刻線が施された丁字頭勾玉と呼ばれるもので、青色不透明を呈する。蛍光 X 線分析の結果、鉛バリウムガラス製（Group LI）であることが確認されている（糸島市教育委員会 2017）。立体的な形状から鋳型で製作されたと考えられている（大賀 2010b）。当該時期の北部九州では、福岡県春日市の須玖五反田遺跡などでガラス勾玉を製作したと考えられる鋳型（第３図）やガラス坩堝、鉛バリウムガラス素材が発見されている。鉛バリウムガラス製の勾玉は、ガラス素材を輸入して日本列島内で加工した代表的なガラス製品であると言える。

鉛バリウムガラスについては、中国で生産されたガラスであると考えられるが、その具体的な産地については不明なものが多い。平原１号墓のガラス勾玉については鉛同位体比分析が行われている（平原弥生古墳調査報告書編集委員会 1991）。鉛同位体比のグラフをみると、前漢鏡が集中する領域 A（平原１号墓出土の一部の方格規矩四神鏡も含まれる）の辺縁部にプロットされる（第４図）。さらに、須玖五反田遺跡のガラス素材をはじめ、当該時期の勾




第4図　平原１号墓出土ガラス勾玉およびガラス管玉ならびに関連遺物および鉛鉱床の鉛同位体比（A式図）

玉の素材として一般的に利用された鉛バリウムガラスとも比較的近しいが、これらが集中する領域からは少し外れている。ただし、本資料の鉛同位体比を測定するにあたっては孔内に付着していた土状物質に含まれる鉛を測定したと記録されており（平原弥生古墳調査報告書編集委員会 1991）、周辺から出土した青銅鏡による汚染を受けている可能性も否定できないため、これ以上産地に関する議論を深めることは難しい。少なくとも、中国産の鉛バリウムガラス素材を日本列島内で加工したものということは言えるであろう。

（２）ガラス管玉（第５図）

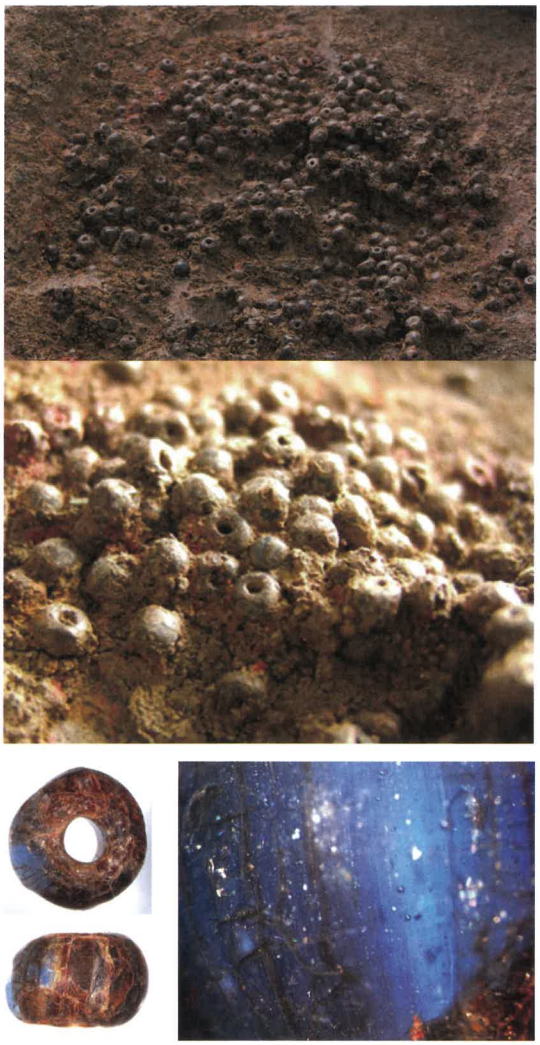
ガラス勾玉以外については、日本列島外から製品として搬入されたものである。ガラス管玉については、風化が進んでいるものが多いが、青緑色不透明の色調で胴張の円筒状を呈する。鉛バリウムガラス製（柳田・角編 2000）（Group LI）で、先行研究（大賀 2010a）によると、同種の管玉（TYIII型）は、北部九州から山陰、近畿北部に分布し、流通期間は弥生時代後期前葉から中葉に集中することから、平原１号墓出土品は伝世品と位置付けられている（大賀 2010b）。

第5図　ガラス管玉（糸島市提供）

ガラス管玉についても鉛同位体比分析が行われている（平原弥生古墳調査報告書編集委員会 1991）。上述の勾玉同様に前漢鏡が集中する領域の近傍にプロットされる。ただし、報告では「劣化して茶褐色になった部分」を測定しており、回収された鉛は極めて少なかったとされている。そのため、鉛の由来については土壌や他の青銅製品などからの汚染の可能性があり、注意が必要である。中国産であること以上の産地の絞り込みは難しい。

須玖岡本遺跡や鳥取県松原遺跡および青谷上寺地遺跡で出土した類例の鉛同位体比は、平原１号墓例よりもやや $^{208}Pb$ ／ $^{206}Pb$ が大きいところにまとまる傾向にある（第４図）。類似の鉛同位体比を持つものとして、唐代の陝西省黄堡窯（唐三彩窯）や遼寧省の鉛鉱床（桓仁鉱山や二棚甸子鉱山）と一致しており、注目される。なお、平原１号墓出土の一部の方格規矩四神鏡とも重複している。

現状では中国大陸で類例は発見されていないが、楽浪土城には出土例がある。一方で、朝鮮半島南部からの出土は稀である点は、日本列島への流入経路



第6図 ガラス丸玉（糸島市提供）

を考える上で重要である。

（3）ガラス丸玉（第6図）

ガラス丸玉については、主体部中央部から359点以上が出土している。後述のガラス小玉と材質的特徴は共通するが、主体部中央部から出土したこれらのガラス丸玉は直径が6～8mmの大型品である。

これらは、当初「琥珀玉」、その後「琥珀蛋白石玉」とされていたが（平原弥生古墳調査報告書編集委員会1991）、その後の分析調査でガラス玉であることが判明している（柳田・角編2000）。これらのガラス丸玉は、軟化したガラスを引き伸ばしてガラス管を製作し、分割した後、再加熱することで小玉を得る「引き伸ばし法」で製作されたガラス小玉である。引き伸ばし法で製作された、直径が6mmを超えない単色の小玉は、インド・パシフィックビーズ（Indo-Pacific Beads）とよばれ、南インドのアリカメドゥ遺跡の成立によって始まり、その後、東南アジア各地に生産地が拡散したといわれている（Francis 1990）。平原1号墓のガラス丸玉は、やや直径が大きいものの、製作技法の共通性からインド・パシフィックビーズに相当すると考えている。

基礎ガラスの種類はカリガラスである。上述したように、日本列島で出土するカリガラスは化学組成によりGroup PIとGroup PIIに細分される。このうち、Group PIのカリガラスについては、着色剤として使用されたコバルト原料の不純物として多量のマンガン（MnO）を伴うのが最大の特徴である。平原1号墓のガラス丸玉は、多量のマンガンを伴うコバルト原料で着色されたカリガラスであり、Group PIに相当すると判断できる。

Group PIの生産地については、インド・パシフィックビーズの生産遺跡として知られる南インドのアリカメドゥ遺跡において、紺色のカリガラスの出土が多いことから、インドで生産された可能性が最も高いと考えられる。日本列島で出土するGroup PIのカリガラス小玉のSr同位体比分析を行ったところ、Group PIのカリガラスは他のガラスと比べて高いSr同位体比を示した（田村2023）。アリカメドゥ出土のカリガラスも同等のSr同位体比を示す（Brill and Stapleton 2012）。さらに、インドのガンジス川流域などでは先カンブリア紀の花崗岩や片麻岩の風化に起因する高いSr同位体比をもつことが知られており、Group PIがインド産である可能性を支持する結果である。

平原1号墓例のような直径が6 mmを超えるような大型のGroup PIのカリガラス玉は、弥生時代後期後葉に出現する（大賀2020）。さらに、弥生時代後期後葉にはGroup PIのカリガラス玉と法量および着色剤が共通し、外観的特徴が極めて類似するソーダガラス（Group SIV）製玉も出現する。Group SIVのソーダガラス玉は、Group PIのカリ

第7図 ガラス小玉（糸島市提供）

ガラス玉よりもわずかに流入時期が降る可能性が指摘されている（大賀 2020）。平原遺跡のガラス丸玉がすべて Group PI に帰属するのか、Group SIV が含まれるのかどうかは重要な課題であるが、土壌ごと取り上げられている個体も多く、判断は容易ではない。基礎ガラスの化学組成が異なれば、劣化形態も異なると推定される。観察が可能な限りにおいてはいずれも同様の劣化形態を示しているように見えることから、残りの個体もカリガラス製であると推察しているが、個々の材質同定については、今後の課題である。

（4）ガラス小玉（第 7 図）

棺内頭部付近からガラス小玉が 492 点出土している。これらのガラス小玉は上述のガラス丸玉と同様に引き伸ばし法で製作されている。ただし、ガラス丸玉とは異なり、直径 2 ～ 4.5mm の小型品で典型的なインド・パシフィックビーズである。カリガラス製であることが明らかとなっており、化学組成の詳細は報告されていないものの、紺色の色調からガラス丸玉と同様に Group PI と推定される。

Group PI のカリガラスについては、上述したように、弥生時代後期後葉にそれまで流通していた直径 3 ～ 4 mm の小型品から直径が 6 mm を超える大型品に変化することが知られている（大賀 2020）。すなわち、平原 1 号墓のガラス丸玉とガラス小玉では流通時期が異なると推定され、ガラス小玉については伝世品であると位置づけられる。

第8図　ガラス連珠（糸島市提供）

（5）ガラス連珠（第 8 図）

平原 1 号墓の木棺の西端部からはガラス連珠が 886 点出土している。これらのガラス連珠は、内外二層構造になっており、内層には気泡の多いガラスが、外層には気泡の少ないガラスが用いられている。最大 4 連珠のものが存在し、単珠のものも多い。

これらのガラス玉のうち 1 点については以前にも

ナイマー・トルゴイ遺跡出土ガラス連珠
（モンゴル）

カルカラ遺跡出土ガラス連珠（カザフスタン）

第9図　ガラス連珠の類例（モンゴル・カザフスタン）の出土位置

材質分析がなされており、ソーダガラスであることが明らかにされていたが（柳田・角編 2000）、製作技法および化学組成のいずれにおいても日本列島や近隣諸国に類例がなく、起源や流入経路も不明なままであった。

近年、筆者らが改めて可搬型の蛍光X線分析を実施した結果、これらのガラス連珠は、ソーダガラスの中でも地中海世界で生産されたナトロンタイプのソーダガラス製であることが判明した（田村他 2021）。さらに、特筆すべき結果として、アンチモン（Sb）が検出されたことが挙げられる。平原遺跡のガラス連珠にアンチモンが含まれる点については以前の調査では言及されていなかった結果である。

ところで、これらのガラス連珠にはマンガン（MnO）が含まれることが以前の調査でも明らかになっていた（柳田・角編 2000）。マンガンもアンチモンと同様に地中海世界においてガラスの消色剤(註)として利用された物質である。地中海沿岸地域で出土したガラスを対象とした最近の研究では、1～3世紀のナトロンガラスのうち、アンチモンを含むガラスはアレクサンドリアなどエジプト沿岸で生産されたと考えられている。一方、マンガンで消色されたナトロンガラスは、シリア・パレスチナ地域（レヴァント地方と呼ばれることもある）で生産されたと考えられている（Barfod et al. 2020）。さらに、アンチモンおよびマンガンの両方を含むものはエジプト産のガラスとシリア・パレスチナ産のガラスの混合であると考えられている。

平原1号墓のガラス連珠は両方の成分が検出されているため混合の可能性が高いが、アンチモン含有量が 0.03 ～ 0.55%であり、地中海世界で出土するアンチモン消色のナトロンガラスにおけるアンチモン含有量（$Sb_2O_5$：0.5%～2%）比べると、その含有量は少ない。一方、平原1号墓の連珠のマンガン含有量は MnO：1.34 ～ 2.13%と多く、シリア・パレスチナ産のナトロンガラスの割合が多いと推定される。

近年、モンゴルの匈奴墓であるナイマー・トルゴイ遺跡やカザフスタンのカルカラ遺跡で類例が発見された（田村ほか 2021、Nakamura et al. 2022）（第9図）。これらは重層構造を持つ特殊な連珠であるとともに、多量のマンガンと少量のアンチモンを含むナトロンガラス製である点で、平原1号墓出土品と酷似する。ガラス連珠は、東地中海沿岸から内陸ルートで日本列島に到達したことが示唆される貴重な資料である。なお、モンゴルの匈奴墓で出土していることを考慮すると、平原1号墓のガラス連珠の日本列島への流入時期は弥生時代後期前葉に遡る可能性も考えられる。

第10図 ガラス耳璫（糸島市提供）

ところで、平原1号墓の連珠の類例が確認されたのは上述の2遺跡だけであるが、モンゴルやカザフスタンなどの草原地帯では他にも様々なナトロンガラスが出土しており、草原の道経由で地中海世界と東アジアがつながっていたことを示している。ただし、内陸ルート経由の地中海世界のガラス玉は、可能性のあるものを含め、遼東または楽浪地域までは確認されるものの、朝鮮半島南部では今のところ確認されていない。平原1号墓の連珠の入手経路を考える上で注目される。

なお、平原1号墓では、主体部中央付近と棺内頭部付近の大きく二箇所にガラス玉がまとまって発見されているが、ガラス連珠が後期前半に遡る可能性が出てきたことから、棺内頭部付近には伝世品（管玉・小玉・連珠）がまとめられていた可能性も考えられる。

（6）ガラス耳璫

最後に、棺内頭部付近から出土したガラス製の耳璫について触れておきたい。劣化のため、当初は上述の丸玉と同様に「琥珀製」その後「琥珀蛋白石製」とされていた（平原弥生古墳調査報告書編集委員会 1991）。その後の調査で、芯部分に紺色透明の色調が観察され、化学分析で5%程度のカリウム（$K_2O$）が検出されていることなどから、カリガラスであると推察されている（柳田・角編 2000）。さらに、マンガンが多く含まれることから、ガラス丸玉や小玉と同様のコバルト原料で着色されたカリ

ガラス（Group PI）の可能性がもっとも高い。耳璫は中国に特徴的にみられる器種であり、インド産のカリガラスを中国で加工したものと推定される。

同色の耳璫は漢代に広く流通し、楽浪土城や楽浪古墳（王盱墓）などでも見られる。これらについては材質分析が行われており、王盱墓出土の細身の１点はカリガラス製であるが、他は鉛バリウムガラス製であることが明らかとなっている（柳瀬ほか2016）。色調のみでは確実な類例を見出すは困難である。中国における同色の耳璫の分析調査が進展し、材質の時期変遷や地域差が明らかになれば平原１号墓の耳璫の具体的な帰属時期や流入経路が明らかになろう。

## 4. 平原１号墓出土ガラス玉類の国際性

最近の化学分析の進展を踏まえて、平原１号墓出土のガラス玉類について概観すると、平原１号墓には、少なくとも中国、インド、東地中海沿岸というユーラシア大陸の遠く離れた３箇所で生産されたガラスが流入していたことが明らかとなってきた。玉の製作地という観点でいうと、ガラス勾玉は中国産の鉛バリウムガラス素材を利用して、鋳型を用いて日本列島内（北部九州、現状では福岡平野が有力）で製作したものであるため、勾玉の製作地は北部九州であるともいえる。まさに、世界中で製作されたガラス玉が平原１号墓に集結していた。

これだけでも驚くべきことであるが、材質分析が進展したガラス連珠に着目すると、類例がモンゴルやカザフスタンで発見されていることから、内陸ルート（草原の道）で東アジアまで到達した可能性が高まった。一方、ガラス丸玉やガラス小玉については、インド産の可能性が高く、東南アジアや中国南部などでも大量に流通していたことから、海洋ルート（海の道）によって日本列島まで到達していたことは明らかである。

このように、ユーラシア大陸各地で生産されたガラス玉類が陸海の異なるルートで東アジアまで到達していたことは、われわれの想像をはるかに上回るスケールの国際ネットワークに当該時期の糸島平野も組み込まれていたことを示しているのである。

【註】

ガラスの消色剤とは、原料に含まれる微量の鉄分によってガラスが青緑色に発色するのを、できるだけ無色透明に近づけるために意図的に添加された成分である。具体的な仕組みについては、下記の通り。ガラス中で鉄は一般的に二価の鉄イオン（$Fe^{2+}$）として存在し、青緑色に発色する。ここに酸化剤として働くアンチモンを加えると、二価の鉄イオン（$Fe^{2+}$）は酸化されて三価の鉄イオン（$Fe^{3+}$）（黄色）になり、色が目立ちにくくなる。これを化学的消色とよぶ。一方、マンガンはガラス中で赤紫を呈する$Mn^{2+}$として存在し、青緑色を呈する二価の鉄イオン（$Fe^{2+}$）と補色の関係にあるため、色が打ち消しあって無色に近づくという仕組み。

なお、平原１号墓のガラスは紺色に着色されているため、消色剤の意味は失われている。消色剤を添加して製造された無色透明の素材ガラスを用途に応じて後から着色したものと考えらえる。

【主要参考文献】


大賀克彦2010a「弥生時代におけるガラス管玉の分類的検討」『小羽山古墳群の研究』213-230.

大賀克彦2010b「ルリを纏った貴人-連鎖なき遠距離交易と「首長の誕生」-」『小羽山古墳群の研究』231-254.

大賀克彦2020「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしえの河をのぼる: 古川登さん退職記念献呈考古学文集』いにしえの河をのぼる製作委員会 pp. 55-64.

春日市教育委員会1994『須玖五反田遺跡』（『春日市文化財調査報告書22』）

肥塚隆保1995「古代珪酸塩ガラスの研究―弥生～奈良時代のガラス材質の変遷―」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集　文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所pp. 929-967.

田村朋美・中村大介・江崎靖隆・河合修・アハン・オンガルリ・アルハット・カリマガンベトフ・ロチン・イシツェレン2021「福岡県平原１号墓出土の紺色重層ガラス連珠の再検討」『日本文化財科学会第38回大会研究発表要旨集』pp. 58-59.

田村朋美2023「Sr同位体比分析による日本列島出土ガラスの産地に関する考察」『文化財論叢Ⅴ』奈良文化財研究所 pp. 795-808.

平原弥生古墳調査報告書編集委員会1991『平原弥生古墳』葦書房

柳田康雄・角浩行編 2000『平原遺跡』（『前原市文化財調査報告書70』）

柳瀬和也・小寺智津子・澤村大地・村串まどか・中井泉2016「可搬型蛍光Ｘ線分析装置による楽浪土城址および楽浪古墳出土古代ガラスと日本出土古代ガラスの化学組成の比較」『Ｘ線の進歩』47, pp.179-198.

山崎一雄1987「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』思文閣 pp. 274-300.

Brill, R.H. and Stapleton, C. P. 2012. Chemical Analysis of Early Glasses vol.3. The Years 2000-2011, Reports, and Essays. The Corning Museum of Glass., Corning New York.

Nakamura, D., Tamura, T., Eregzen, G, Lochin, I., Odbaatar, T. 2022 Scientific and archaeological approach for the Glass beads trade of Xiongnu and Xianbei. Studia Archaeologica XL (6). pp. 50-59.

Francis, P. 1990. Glass beads in Asia Part2. Indo-Pacific beads. Asian Perspectives, 29-1, 1-23.

Oga, K., Tamura, T. 2013 Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). Journal of Indian Ocean Archaeology, 9. pp .35-65.

[基調講演３]

# 大型化する弥生墳墓と平原王墓

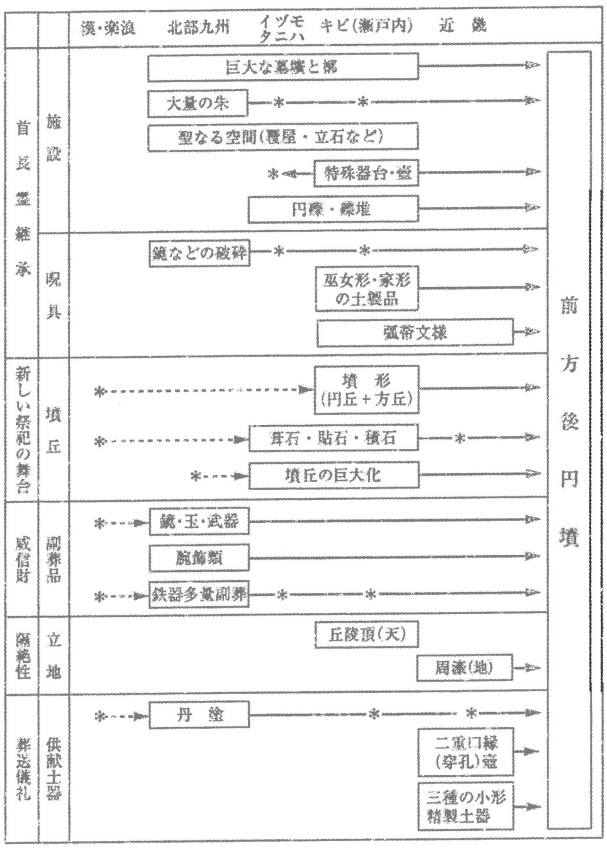
京都橘大学 文学部 歴史遺産学科 准教授
南　健太郎

## はじめに

弥生時代の墓は実に多様である。木材で棺を設えた木棺墓、石材で棺を設えた箱式石棺墓、墓穴のみしかみつからない土壙墓、そして弥生時代の九州独自の埋葬方法である土器（主に甕）に遺体を納める甕棺墓などがあり、地域や時期によってどのようなスタイルの墓を採用するのかが選択されていた。弥生時代の九州では殊更多数の甕棺墓が調査されており、社会の一般成員の多くが甕棺墓に葬られたと考えられる。一方で、甕棺墓の中には各地域の有力者の墓も含まれていた。例えば、『魏志倭人伝』に記載される国々の一つである伊都国の王墓に位置づけられている福岡県糸島市三雲南小路遺跡では、２基の甕棺墓が調査されている。弥生時代中期後半の甕棺で、多彩な副葬品が出土している。また弥生時代後期前半の佐賀県桜馬場遺跡では豊富な副葬品が１基の甕棺に集中していた。このように、弥生時代後期前半まではいかなる階層の人々も、甕棺墓というスタイルを採用していたと考えられるのである。しかし、甕棺墓の風習は弥生時代後期前半から一気に減少する。さらに後期後半には減少が加速し、主だった墓群では甕棺墓はほぼ姿を消してしまうのである（常松 2011）。

このような遺体を納める棺に加え、弥生時代の墓で注目される要素として墳丘がある。弥生時代の墓は墳丘をもたないものが一般的だが、稀に墳丘を有する墓（墳墓）がみつかる。墳墓にも様々な形態がある。墳丘形態は大きく分けて円形と方形があり、さらに周囲に溝を掘削して墓と周囲を切り離すものも確認されている。また、円形の墳丘に方形の突出部が敷設されるものもみられる。墳丘には複数の埋葬施設が設けられるものと、単独、もしくは極めて少数の埋葬施設しか設けられないものがある。九州では弥生時代中期初頭の福岡県福岡市板付田端遺跡で多数の甕棺墓を有する墳墓が確認されており、以後、佐賀県吉野ケ里町吉野ケ里遺跡や福岡県福岡市吉武樋渡遺跡でも同様の墳墓が確認されている（常松 2007）。そして弥生時代中期後半には上述の三雲南小路遺跡、そして福岡県春日市須玖岡本Ｄ地点墓において、極めて限定された人物のための墳墓が構築されるに至る。この後、弥生時代後期においては墳墓の様相は明確ではなくなるが、弥生時代終末期において九州各地で墳墓がみられるようになる（岩永 2011）。この弥生時代終末期に弥生時代で最も豊富な副葬品を有する福岡県糸島市平原遺跡１号墓（以下、平原王墓と記す）が出現する。平原遺跡王墓は伊都国最後の王墓と考えられており、弥生時代終末期の日本列島の実像を探るための鍵となる墓である。

このような弥生時代の墓の研究は、後に到来する前方後円墳の時代がどのような過程を経て成立したのかという問題に直結するものである。これまでの研究では、前方後円墳のもつ諸要素は弥生時代において各地で萌芽・発達し、「地域性を継承しつつ一つの飛躍をとげ、その中で地域性を切断する統一的祭祀としてあらわれた」とされている（近藤 1983）。つまり各地域の首長墓で採用されていた墓での儀礼行為や墓の構築方法が集約される形で前方後円墳が創出されたと考えられているのである（寺沢 2023、第１図）。平原王墓が築かれた弥生時代終末期は、日本列島の各地で墳墓の造営が盛んになる時期である。平原王墓の時代を解き明かすことは、地域性が顕著な弥生時代と、統一された秩序によって造墓活動が規定される古墳時代がどのように接続するのかを考える上で極めて重要である。本論では弥生時代の墳墓の動向を整理し、墓制からみた平原王墓の位置づけについて考えてみたい。




第1図 前方後円墳の創出モデル(寺沢 2023 より)

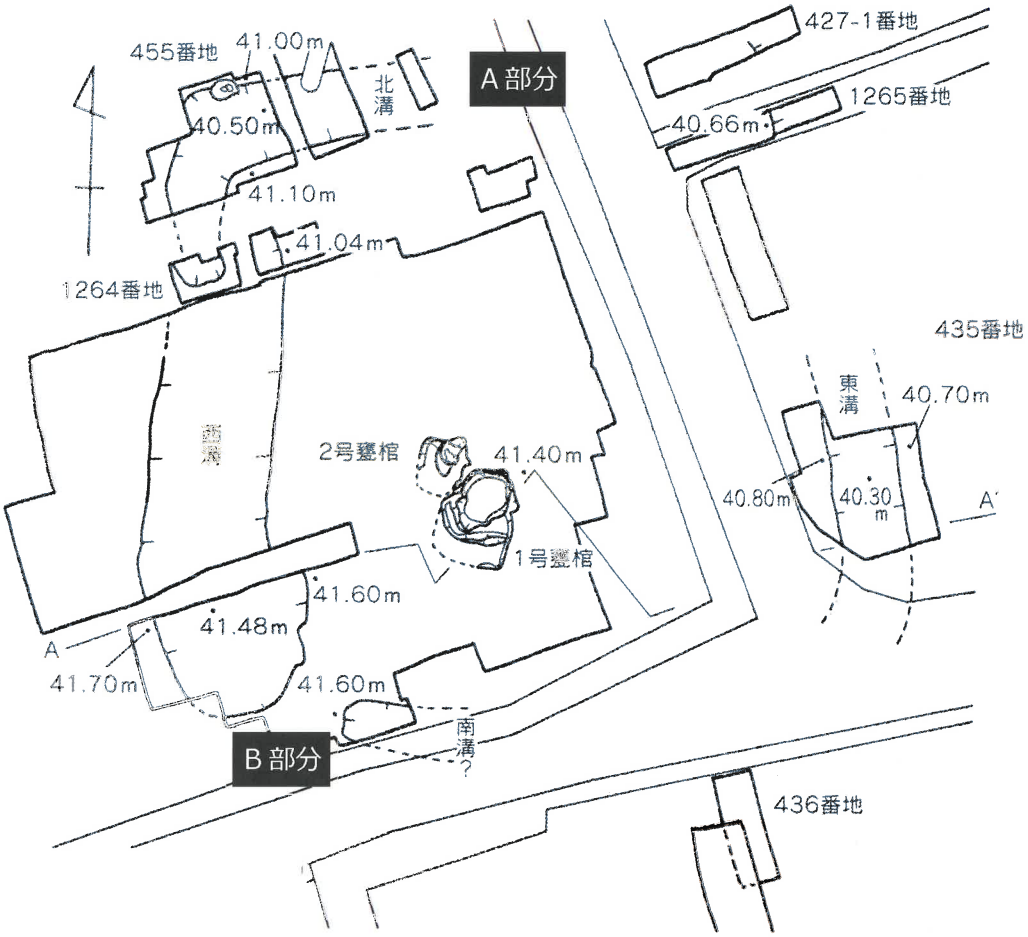
## 1. 北部九州の墳墓

まず平原王墓が所在する北部九州における墳墓の様相についてみていきたい。北部九州では上述のように弥生時代後期の様相が終末期まで明瞭ではなかったが、近年は平原王墓の周辺で墳墓が確認されている。そこで、まず平原王墓周辺のいわゆる伊都国の領域における弥生時代中期後半から終末期の墳墓の築造状況を確認し、さらに終末期における他地域の状況を整理していく。

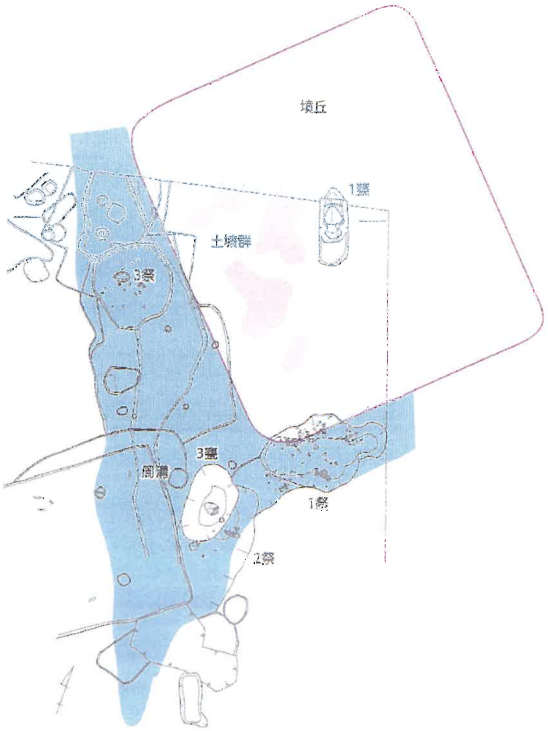
①伊都国における墳墓築造の展開

伊都国ではまず弥生時代中期後半における三雲南小路遺跡１号甕棺・２号甕棺があげられる（福岡県教育委員会編 1985、糸島市教育委員会編 2013）。２基の甕棺は隅丸方形に巡る溝によって周囲と遮断されており、江戸時代の文政５（1822）年の発見時の記録から、少なくとも高さは２mほどはあったと考えられている。墓域を区画する溝は隅丸方形に巡らされている。その規模は区画溝の内側で一辺32 mを超えるものであり、溝の外側では最大径約41 mを測る（第２図－１）。この区画溝で注目される点が３つある。それはⅠ：溝は全周していないこと、Ⅱ：溝が埋没した後に再掘削されていること、Ⅲ：溝の外縁部付近に墳墓に後続する墓が築かれていることである。Ⅰについては溝が確認されていないのは、北西角から東へ 10.5 m以東（第２図－１のＡ部分）、そして南西角部の東側（第２図－１のＢ部分）である。Ａ部分は築造時の低地部にあたっていた可能性が指摘されており、溝で区画する必要がなかったものと思われる。一方でＢ部分は明瞭に溝が途切れている状況がみてとれる。この部分を墓域との出入口と考え、甕棺の墓壙と設置方向の関係性をみてみよう。甕棺は２基とも墓壙の形態と甕棺の出土状況からみると、南西側から設置されたことが明らかである。この方向は出入口の位置と一致している。さらに発掘時の標高から考えると、出入口は墓域の最高所付近に設けられていた可能性が考えられる。甕棺を設置後に墳丘を設けていることから、出入口が機能していたのは甕棺の設置・埋め戻しまでであり、墳丘が構築された後はその場所のみが墳丘も溝もかからない空間であったと考えられる。Ⅱについては、弥生時代中期後葉の築造後、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて溝の掘り直しや、土器を用いた祭祀行為が繰り返されていたことが指摘されている。このことは本墳墓は築造後、古墳時代前期までその威容が保ち続けられていたことを示している。祭祀行為が墳墓完成後も長く続いている様子からは、本墓の被葬者たちへ向けられた崇敬が古墳時代前期まで絶えていなかったことがわかる。Ⅲについては、溝の外縁部で小児用の甕棺墓１基と土壙墓が確認されている。いずれも溝が埋まった段階で構築されているが、時期が明確な甕棺墓は弥生時代後期初頭のものであり、墳墓の構築、溝の埋め戻しが短期間で行われたことがわかる。時期的には墓域の中央に埋葬された２期の甕棺に継続するものであり、小児用と考えられる小型の甕棺であることからは、２基の甕棺に関係する子どもの墓であった可能性がある。また土壙墓は二段墓壙であるが、下段下端の長軸長は約 1.06 mであり、こちらも小型の部類である。小児用甕棺よりは大きいが、成人を埋葬することができるようなスペースはない。これらのことから、周辺に葬られた人物は、中心埋葬に連なる非成人の人物であったものと考えられる。

三雲南小路遺跡に若干先行する時期に築かれた墳墓として挙げられるのが井原塚廻遺跡である（前原町教育委員会編 1993、岡部 2016）。本遺跡では

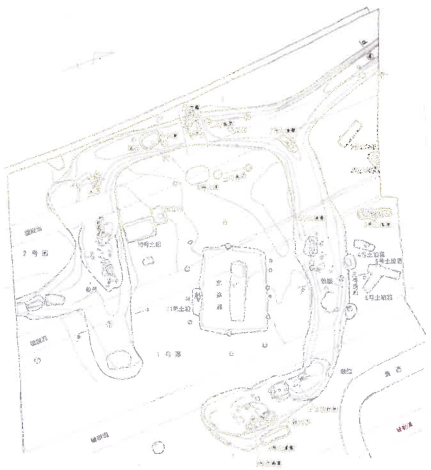



1　三雲南小路遺跡（糸島市教育委員会編2013を一部改変）
（径32m+/径約40m）




2　井原塚廻遺跡（岡部2016より）
（径13m～14m）

3　平原遺跡5号墓
（柳田・角編 2000より）
（5.2m×5.6m/8m×7.7m）



4　平原遺跡1号墓（平原王墓）
（柳田・角編 2000より）
（9.5m×13m/14.4m×18.2m）

※遺跡名（溝で囲まれた範囲の径/溝の外縁径）

0　20m
（S=1/400）

第2図　伊都国の墳墓

１号甕棺墓とそれを周囲と遮断するかのような溝が確認されている。溝は全体が検出されていないが、方形にめぐっていたものと考えられている（第２図－２）。注目されるのは、１号甕棺墓と区画溝の埋没後に構築された小児用甕棺である３号甕棺墓の関係性である。通常は小児用甕棺は成人用甕棺よりも浅く埋置されるが、本遺跡では両者の墓底がほぼ同じ高さになっている。このことは１号甕棺墓の墓壙掘削は小児用甕棺墓よりも高い位置からの掘り込みであったことを示しており、本墓は区画溝の内側に墳丘を有していたと考えられる。墳丘の高さは他の墓の墓壙掘り込み深度から考えて１～1.5 mと想定されている。墳丘の規模は一辺13～14 mであったと考えられている。さらに注意すべきは、上述の小児用甕棺である３号甕棺墓が区画溝の埋没後、コーナー部に構築されており、その時期が１号甕棺墓に後続している点である。墳丘・区画溝の構築に加えてこの状況は三雲南小路遺跡と共通している。一方で三雲南小路遺跡が古墳時代前期まで溝の再掘削と祭祀行為が継続していたのに対して、本墓では区画溝の埋没後に他の墓に対する祭祀土壙が掘削されており、中心となる被葬者の埋葬後の扱い方が異なっている。

井原塚廻遺跡、三雲南小路遺跡に後続するのが、弥生時代後期初頭から前半に築かれた平原遺跡５号墓である（柳田・角編 2000、第２図－３）。本墓は埋葬施設が舟形の可能性のある木棺であり、木棺を据える墓壙は二段になっている。一段目の掘り込みが 10cm 未満と浅いため、本来はより高位から墓壙が掘りこまれていたものと思われる。埋葬施設は隅丸方形の溝で囲まれている。築造当初は溝が全周していたが、ある程度埋まった段階で溝の上部に弥生時代後期前半の小児用甕棺墓が築かれており、この甕棺墓を取り囲むように溝は外側に拡張されている。拡張された溝は築造当初とは異なって全周しておらず、南東コーナー部は溝の内外を行き来できるような陸橋部となっている。なお、区画溝内の墳丘についてはその痕跡が明瞭ではないが、井原塚廻遺跡と同様に中心埋葬施設と区画溝上に築かれた甕棺墓の墓壙の標高から考えてみたい。中心埋葬施設の墓壙底の標高は約 39.1 m、墓壙の深さが約 0.6 mであるのに対し、甕棺墓の墓壙底の標高は 38.62 m、墓壙の深さは 0.9 mであり、周辺埋葬の甕棺墓よりも中心埋葬施設のほうが掘り込みが深くなるとすると、本墓も墳丘を構築していた可能性が高いと考えられる。溝の埋土の状況からは、区画溝の掘削から埋まるまでの過程は、区画溝の掘削→溝が埋まる→甕棺墓の構築→墳丘盛土の崩落→溝の拡張→溝が埋まる、という状況を復元することができる。このように墳丘を有する点、築造・区画溝埋没後における小児甕棺墓の構築、区画溝の再掘削は三雲南小路遺跡と同様の状況と捉えられる。一方で本墓ではじめてみられる特徴として、隅丸方形に巡る区画溝の角部からさらに溝が派生している点を指摘することができる。これは区画溝からの排水溝である可能性があり、陸橋部の対角の位置にとりついている。

弥生時代後期中頃から後期後半の様相は不明瞭であるが、終末期において平原王墓が築造される（柳田・角編 2000、第２図－４）。平原王墓は平原５号墓の東側に築造されている。築造された時期は弥生時代終末期である。隅丸方形の区画溝が掘削されており、その内部の中心から北東側に寄せた位置に埋葬施設が設けられている。埋葬施設は長方形の墓壙のやや北よりに割竹形木棺が据えられたものであった。区画溝は南東角部で 3.8 m分が途切れており、全周していない。この部分が出入口になっていたと考えられる。出入口の対角には排水溝が掘られおり、北へと伸びる。この位置関係は平原遺跡５号墓と共通する特徴である。墳丘についての情報は少ないが、木棺を覆う必要があるため、遺構検出面から最低でも１m程度は高い位置に墳頂があったと考えられる。報告書では地元で「ツカバタケ」と呼ばれていることから近世まで墳丘が存在しており、２m以上の高さの墳丘規模も想定されている。これまでみてきた３墓でみられた溝の埋没後の再掘削については明確ではない。しかし、区画溝の北側から西側で土壙墓が９基確認されている。このうち、位置的に区画溝の上部にくる１－７号土壙墓は溝埋没後に構築されたと考えられている。長さは 1.16 m、最大幅は 0.47 mであり、多様な玉類が副葬されていた。墓壙のサイズからは成人とは考えられず、子どもの埋葬であった可能性が高いだろう。この時期は上述のように甕棺墓の衰退期であり、子どもも土

墳墓などに埋葬されることが多かったと考えられる。溝の埋没過程が不明瞭であるため確実な構築時期はおさえられないが、後続する墓である平原遺跡３・４号墓の築造時期である３世紀後半までには築造されたものと思われる。また平原王墓の南側には区画溝を共有する２号墓が築造されている。２号墓も隅丸方形の溝によって区画されており、中心よりもやや東側に埋葬施設が設けられている。墳丘はすでに削平されており、詳細は不明である。区画溝も全体像は明確ではないが、西側は溝状の掘り込みが二重に検出されており、拡張がおこなわれた可能性もある。注目すべきは区画溝に重なる位置で確認された土壙墓である。２－１号土壙墓は溝の底で確認されており、残存長 1.68 m、幅は 0.28 ～ 0.37 mを測る。長さからは成人が埋葬されていた可能性が考えられる。埋土の状況から溝が埋没する前に掘り込まれていたことが指摘されている。一方で、残存状態の悪い溝状の掘り込みが確認された西側掘り込み群の北側延長線上で確認された２－２号土壙墓は長さ 0.98 m、幅 0.55 mで、小型である。サイズからは子どもの墓とも捉えられ、この場合は区画溝埋没後の構築であった可能性も考えられる。後者が溝埋没後の子どもの埋葬であった場合は、先にみた３墓と共通するものであり、興味深い。

ここまでみてきたことをまとめると、伊都国の墳墓については以下の点を指摘することができる。

- 平面形態はすべて隅丸方形である。
- 溝で区画するが、コーナー部に出入り口を設ける場合が多い。
- 第一次埋葬終了後に溝が埋没し、溝上には若干時期の遅れた子ども用の墓が設けられる。
- 三雲南小路遺跡では弥生時代中期後葉の築造以降、区画溝の再掘削、祭祀行為が古墳時代前期まで繰り返されている。
- 墳丘の平面形態は隅丸方形で統一されている。
- 墳丘規模は三雲南小路遺跡が最も大きく、その後に築造された墳墓はこれよりも小さい。

②弥生時代終末期における墳墓築造状況

北部九州で弥生時代中期後半から継続的に墳墓が確認されているのは伊都国に限られるが、平原王墓の築造とほぼ同時期に各地域で墳墓築造が始まる。中でも佐賀県唐津市中原遺跡では、平原王墓の築造と前後する時期に墳墓が連続して築かれている。ここでは中原遺跡の墳墓について概観し、そこから北部九州全体の墳墓築城状況についてみていこう。

中原遺跡では弥生時代後期後葉から終末期における３基の墳墓が相次いで築造されている（佐賀県教育委員会編 2012）。３基は墓域を画する溝を有しており、築造順にその規模を示すと、ST13414 が溝の内側で 16m × 12.8 m（溝の外側：22.3 m × 19.1 m）、ST13398 が溝の内側で 16.5 m（溝の外側：20 m）、ST13415 が溝の内側で 10 m× 11 m（溝の外側：13.3 m× 13.5 m）である。区画溝の形態は隅丸方形を志向している。注目すべき溝の配置と陸橋部の位置である。溝は３基とも全周しておらず、少なくとも一辺は溝を有していない。ST13414とST13398は区画溝を共有しているが、墳墓の築造に当たっては後者が前者を切っている。また陸橋部はいずれも中心埋葬施設の長軸延長線上に配されている。これらの特徴は伊都国の墳墓とは大きく異なっている。また、区画溝の埋没後に中心埋葬施設に後続する小児墓が築かれていない点も伊都国とは異なる様相と言える。しかし一方で、墳墓のサイズは最もはやく築造された ST13414 が最も大きく、時期が新しくなるにつれて縮小化する傾向がある。このことは伊都国の弥生時代後期以降の墳墓が中期後半の三雲南小路遺跡を超えることがなかった点と類似した現象といえる。

このように墳墓を構成する要素は地域によって様々な様相をみせている。一方で、サイズについては古墳時代の開始に向けて大型化しない、むしろ小型化しているという傾向がより一層明確となった。ここで北部九州における弥生時代終末期の墳墓のサイズについて検討してみたい。ここでは弥生時代終末期を終末期前半（久住編年（久住 1999）ⅠA期：久住 1999）と終末期後半（同ⅠB期）に分けてみてみよう。なお、平原王墓は前者に属し、後者はそれ以降、そしてそれに続く久住編年ⅡA期を定型化した前方後円墳が成立・拡散する時期とする。

終末期前半に属する墳墓は類例が少ないが、墳形、規模が明らかなものとして福岡県福岡市宮ノ前Ｃ遺跡、同老司観音山遺跡が挙げられる。前者は方丘部に短い突出部をもち、15 mの規模を測る。後者は方形の墳丘で７m×８mと小型である。一方で、４

基の埋葬施設をもつ福岡県みやこ町小長川遺跡は方形の墳墓で、一辺は約 22m を測ると想定されている。小長川遺跡は銅鏡などの副葬品を有するものの、平原王墓のような豊富な質・量の副葬品があるわけではないが、広い面積の墳墓を構築している。終末期後半には墳墓が大幅に増加し、墳形も円形、方形、前方後円形、前方後方形、とバラエティに富む。最大規模を誇るのは佐賀県吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡 ST2200 で全長 40 mを測る。墳形は前方後方形であり、全周する溝を有している。これに次ぐのが福岡県福岡市比恵遺跡の方形の墳墓、福岡県小郡市津古 2 号墳の前方後円形の墳墓である。規模は前者が 30 m、後者が 29 mである。このように北部九州では弥生時代終末期後半に至って墳丘の大型化傾向がみられるようになり、この直後に 85 mの規模を誇る前方後円墳である福岡県福岡市那珂八幡古墳が築造され、各地にも前方後円墳を主体とした古墳文化が波及するようになる。

## 2. 吉備、大和の弥生時代後期から終末期の墳墓築造

ここまで北部九州の墳墓築造の動向についてまとめてきた。本章では視点を九州から東に移し、前方後円墳の成立に大きく関与したと考えられる吉備地域と大和地域の墳墓築造の様相についてみてみよう。

①吉備地域

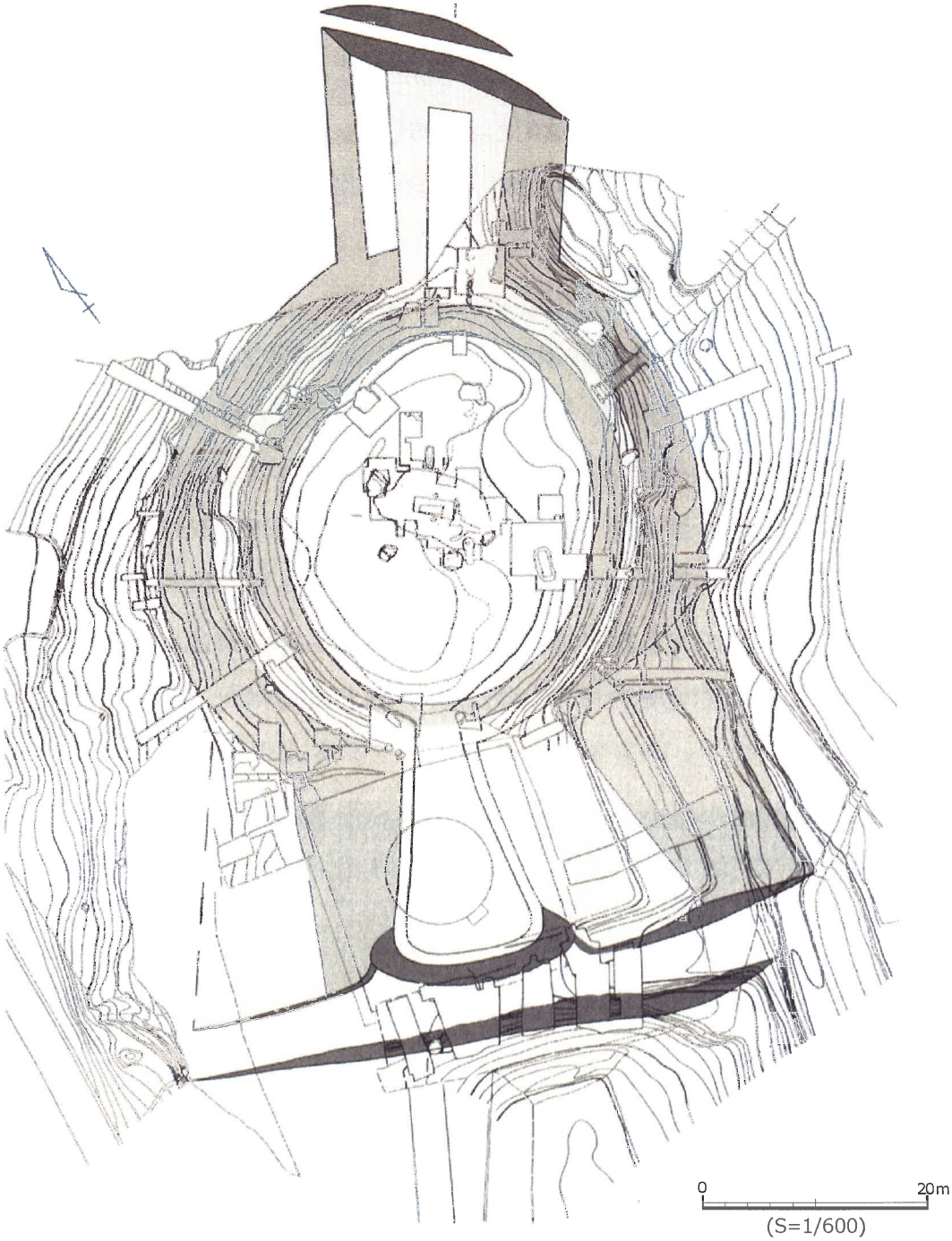
吉備地域では弥生時代後期後葉に特殊器台形土器、特殊壺形土器が創出され、これらは後に古墳を飾る円筒埴輪、壺型埴輪へと変容した（近藤ほか 1967）。前方後円墳における祭祀形態の重要な部分の起源地ともいえる地域である。この特殊器台形・壺形土器は岡山県倉敷市楯築墓の築造が契機となって創出されたものであると考えられている（近藤編 1992、宇垣 1992、大久保 2017）。そして本地域の墳墓の展開も楯築墓が鍵となっている。本地域は弥生時代後期後半から墳墓築造が活発化するが、その端緒となったのが楯築墓である。楯築墓が築造されたのは平原王墓よりもはやい段階の後期後葉新相にあたる。墳丘の形態は極めて特殊で、円丘部を中心として、相対する二方向に長方形の突出部を設けている。全長は推定 83 mとされており、この時期の墳墓としては日本列島最大の規模を誇る（第 3 図：宇垣編 2021、宇垣 2024）。吉備地域では楯築墓に続いて、岡山県倉敷市黒宮大塚墓、同鯉喰神社墓、が築かれる。両者は方形の墳丘を有しており、その規模は前者が 30 m × 28 m、後者が 40 m × 38 mとされる。当地域ではさらに相前後する時期に径 20 m程の墳墓が築かれる。この後、当地域では終末期後半にほぼ併行する時期に、岡山県岡山市矢藤治山弥生墳丘墓や宮山遺跡といった前方後円形墳丘墓が築造される。全長は、前者が約 35.5 m、後者が約 38 mである。前時期の方形基調の墳丘墓と規模的には同程度であると言える。

このように吉備地域では墳墓築造の端緒となった楯築墓を最大とし、その後も墳墓築造は継続的におこなわれるものの、弥生時代のうちには楯築墓を超えるような規模の墳墓は築造されていない。北部九州では前方後円形、あるいは前方後方形の墳丘墓の誕生と同時に墳丘が大型化へと向かったが、吉備地域ではその段階においてもなお墳丘の大型化には至っていない。しかし、この次の段階、すなわち定型化した前方後円墳の拡散期に全長 130 mを超える浦間茶臼山古墳が築造される。墳墓の飛躍的な大型化はこの段階に求められる。

②大和地域

近畿地方では弥生時代前期末から溝を方形に巡らせて墓域を区画する方形周溝墓が築造されており、さらに円形周溝墓の築造も各地で展開する。墓域を区画し、墳丘を有する墓は珍しいものではなかったと思われる。これらの周溝墓の中には単数埋葬と複数埋葬の両方が含まれており、後期初頭までの段階で、階層構造が反映されたことが指摘されている（藤井 2007）。このような周溝墓は後期を通じて各地域で築かれるが、墳墓の展開で欠かせないのが、大和地域の様相である。大和地域は最古の前方後円墳と目されている奈良県桜井市箸墓古墳を生み出したことで著名だが、その前段階で纒向型前方後円墳と呼ばれる前方後円形の墳丘墓を創出している（寺沢 1988）。纒向型前方後円墳は前方後円墳の直接的な祖型となったと考えられており、弥生時代の墳墓の動向を考える上でも重要な地域である。ここでは前方後円形墳丘墓のサイズの展開を検討してみよう。

重要な墳墓として挙げられるのは奈良県桜井市纒向石塚墓、同ホケノ山墓、さらに近年確認された奈良県奈良市瀬田遺跡 SZ4500 である。この 3 基の




第3図 楯築墓の墳丘復元図(宇垣 2024 より)

なかで最も古いのは瀬田遺跡 SZ4500 である（森川ほか 2017)。藤原京の造営によって上部を削平されていたが、周溝はほぼ全形がわかる状態で残存しており、前方後円形の墳墓であることが判明した。築造時期は墳丘を巡る溝から出土した土器から、弥生時代終末期前半と考えられる。周溝を含む全長は約 25.5 mであり、後円部と突出部の長さは 3：1 となる。一方で終末期後半のホケノ山墓も同様な形態をとる。全長は約 80 mであり、定型化前方後円墳出現以前においては、上述の楯築墓に唯一匹敵する規模を誇っている。さらにこの前後に築かれた纒向石塚墓は全長が約 99 mであり、その規模は箸墓古墳築造以前の日本列島において類を見ないものであったと思われる。このように大和地域では、弥生時代終末期前半から古墳時代の開始期に向けて、前方後円形の墳墓を大型化させていった状況が見て取れる。この方向性はこれまでみた北部九州や吉備地域とは相反するものであり、墳丘の大型化と前方後円墳化が同時進行したことを物語っている。

### 3. 墳丘からみた平原王墓の性格

本論では北部九州における墳墓の築造動向を検討し、伊都国における墳墓築造の特質を抽出した。また吉備地域、大和地域の様相を検討することで、列島規模での古墳時代開始に向けた墳墓の築造動向を整理した。最後にこれらを総括し、平原王墓の性格について考えてみたい。

伊都国における墳墓築造の動向からは、平原墳墓はそれまでの伝統を重視して築かれたと考えられる。それは三雲南小路遺跡の墳墓が古墳時代前期まで記念碑的な位置づけを保ち続けていたことに起因するのだろう。三雲南小路遺跡の被葬者は中国王朝との交渉権を掌握し、日本列島内の他地域への配布に関する権利を有した人物である（柳田 1983・2002）。また先進的な文物とそれに付随する情報を他地域に先駆けて手中にし、それによって地域間関係の構築システムを開拓した（南 2019）。それは伊都国の列島内での地位を確固たるものにし、以後その存在感は群を抜くものであった。そのような人物の墓が長期にわたって存在し続けたことによって、伊都国では墳墓築造にあたってそれがモデルとなり、ある意味では規範にもなっていたと思われる。このことは伊都国において三雲南小路遺跡のスケールを超える墳墓の築造にストップをかけた要因であったとも考えることができる。このような展開は、楯築墓という圧倒的なスケールの墓を創出した吉備地域とも共通している。吉備地域でも楯築墓の築造以後はそれを凌駕する規模の墓は前方後円墳の築造開始期まで築かれておらず、さらに当地域では、楯築墓と同構造の墓すらも作られなかった。一方、大和地域はこれらの地域とは異なり、時期が下るにつれて徐々にスケールアップが図られていき、すでに前方後円墳創出前夜において日本列島で最大の墳墓祭祀の舞台が準備されたと思われる。

ただし、平原王墓は伊都国内の伝統を継承するに留まる存在ではなかった。それは銅鏡の破砕副葬、大柱祭祀といった葬送儀礼に現れている。銅鏡の破砕副葬は吉備から近畿地方、さらに東方の有力者の墓で行われており、大柱祭祀は楯築墓でも確認されている。そこからは平原王墓の被葬者はこのような九州から関東までの広域に及ぶネットワーク形成に貢献した人物であったと考えられる。伝統を重んじた墳墓、最先端の葬送儀礼、さらに他の追随を許さないほどの中国系文物の保有からは、墳丘規模からだけでは測れない、平原王墓の一面を垣間見ることができるだろう。

本論を草するにあたり、以下の方々からご教示、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます（敬称略）。久住猛雄、小嶋篤、柴田亮、平尾和久、弘中正芳

【参考文献】
糸島市教育委員会編2013『三雲・井原遺跡Ⅷ－総集編－』糸島市文化財調査報告書第10集
岩永省三2011「墳丘墓と首長層の形成」『講座日本の考古学6 弥生時代(下)』 青木書店
宇垣匡雅1992「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究(上)』 山陽新聞社
宇垣匡雅2024『新日本の遺跡④ 楯築遺跡』同成社
宇垣匡雅編2021『楯築墳丘墓』岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室
大久保徹也2017「装飾土器の展開と楯築墓」『楯築墓成立の意義』考古学研究例会シンポジウム記録11 考古学研究会
岡部裕俊2016「井原塚廻遺跡の再検討－弥生時代中期後半～後期の墳墓群の新資料から－」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』11 糸島市立伊都国歴史博物館
近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店
近藤義郎編1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
近藤義郎・春成秀爾1967「埴輪の起源」『考古学研究』13巻３号
久住猛雄1999「北部九州における庄内式期併行の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
佐賀県教育委員会編2012『中原遺跡 12区・13区の古墳時代初頭前後の墳墓群の調査 ―西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(11)―』佐賀県文化財調査報告書第193集
常松幹雄2007「北部九州における弥生時代の区画墓と標石」『四隅突出型墳丘墓と弥生時代墓制の研究』 島根県古代文化センター 島根県埋蔵文化財調査センター
常松幹雄2011「甕棺と副葬品の変貌」『弥生時代の考古学３ 多様化する弥生文化』 同成社
寺沢薫1988「纒向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』 同志社大学考古学研究室
寺沢薫2023『卑弥呼とヤマト王権』中央公論新社
福岡県教育委員会編1985『三雲遺蹟 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
藤井整2007「近畿における方形周溝墓の基本的性格」『考古学リーダー10 墓制から弥生社会を考える』 六一書房
前原町教育委員会編1993『三雲塚廻遺跡』
南健太郎2019『東アジアの銅鏡と弥生社会』同成社
森川 実・清野 陽一・山本 亮・和田 一之輔・浦 蓉子・小林 和貴・能城修一・鈴木 三男2017「藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡の調査 －第187次」『奈良文化財研究所紀要2017』 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
柳田康雄1983「伊都国の考古学－対外交渉のはじまり－」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
柳田康雄2002『九州弥生文化の研究』学生社
柳田康雄・角浩行編2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集

[シンポジウム]

# 伊都国最後の王墓、平原王墓に迫る

糸島市地域振興部文化課
コーディネーター　河合　修

## 1. 発見・発掘調査から60年をむかえた平原王墓

1965年1月の「平原王墓」の発見・発掘調査から60周年を迎えた。

今日、平原王墓は国史跡に、また出土品は国宝に指定されているが、その歴史的評価は発掘直後から学界を揺るがし、以後の弥生墳墓研究、さらには倭国形成において伊都国が果たした役割を考える大きな契機となったといえる。

本シンポジウム（第Ⅱ部）では、この60年の研究史をふり返りつつ、平原王墓が果たした歴史的意義を多角的にとらえ直すとともに、この王墓の被葬者像を探り、倭国形成との関連、そして今後の保存と活用のあり方などについて議論を深めていきたい。

## 2. 平原王墓の被葬者像をめぐる視点

第Ⅰ部の平尾氏の調査報告では、昭和40（1965）年の発見・発掘から今日まで平原王墓の研究と保存・活用の歩みが報告された。

その中で、まずは発見当初から報告書刊行まで調査をリードしてきた、原田大六氏と柳田康雄氏それぞれが提示した被葬者像を再確認しておきたい。

原田氏は、副葬された多量の鏡・玉類などの内容から、平原王墓を「女王」と位置づけた。さらに副葬鏡の一つである内行花文八葉鏡を「八咫鏡」と同一視し、周辺遺構から「殯宮」の存在を読み取り、墓主を玉依姫命すなわち大日孁貴（天照大神）とする説を提示した。『古事記』『日本書紀』の記述を北部九州の古代史の反映と捉え、平原王墓を伊都国王統に連なると同時に倭国全体の権力構造に深く関わる象徴的存在としたのである。さらに、埋葬方位が日向峠からの10月20日の日の出、すなわち伊勢神宮の神嘗祭の日と一致することを指摘し、太陽信仰や農事暦との関連性に着目した点は先見的といえる。

一方、柳田氏は、発掘調査に学生として参加した経験をもとに、その後も一貫して平原王墓の研究を継続。2000年の報告書刊行に際しては発掘記録や銅鏡など出土品の詳細分析に基づき、より客観的かつ実証的な被葬者像を再構築した。

柳田氏は、墳墓の地形的位置、土器や鉄器、耳璫、超大型内行花文鏡などの出土遺物から導きだされる墳墓の年代、主体部やその周辺を含む遺構の状況、銅鏡の出土状況などにみられる特徴を抽出し、この墳墓を「平原巫女王墓」と解釈し、被葬者を巫女の中の特別な巫女王とする見解を示している。

両者がそれぞれに示した被葬者のイメージは、今日では見解の相違を残しながらも相互に補完されつつ、現在の公式的な被葬者像の基盤となっている。すなわち、平原王墓の被葬者は「女王」であり、同時に「巫女王」としての性格を持ち、政治権力と祭祀権能を併せ持つ存在であったと考えられている。これは『魏志倭人伝』に描かれる「鬼道」に事え、人心を惑した「卑弥呼」の姿を強く想起させ、北部九州における倭国王権の実態とその祭祀的背景を考える上で重要な示唆を与えている。

## 3. 遺構・遺物の今日的評価を問う

では、この被葬者像を考える上で必要となる、平原王墓の遺構と遺物の今日的な評価はどのように位置づけられるのだろうか。

まず遺構について、方形周溝墓という形式の採用の意味、割竹形木棺と副葬品の配置、周辺遺構の状況から、被葬者の地位や葬送観念をどのように解釈できるかを問いたい。

遺物（副葬品）では、日本最大級の超大型内行花文鏡をはじめ40面分の銅鏡の評価が中心となろう。舶載鏡か仿製鏡か、破砕副葬の意義、鏡式の構

成や製作年代、「踏み返し」技法の可能性、さらに着色痕跡の意味、銘帯にある「陶氏作」・「尚方作」銘の意味など、多角的な検討と議論を通じて、被葬者像とその社会的背景、さらには地域間交流のあり方を探ることができるはずである。

加えて、メノウ管玉や素環頭大刀、多量のガラス製品など特徴的遺物の評価も、この王墓の性格を理解する上で不可欠の論点である。

### 4. 伊都国王墓とガラス

平原王墓には多数のガラス玉類が副葬され、伊都国の国際性を示す重要資料となっている。三雲南小路王墓や井原ヤリミゾ遺跡などからも多量に出土しており、「ガラス」は伊都国の葬送文化を象徴する遺物のひとつといっても過言ではない。

田村朋美氏の講演では、弥生中期から古墳時代に至るガラス流入の実態が示された。分析の結果、鉛ガラス・カリガラス・ソーダガラスの三系統が確認され、中国、インド、地中海といった広域生産地との対応が明らかにされた。

とりわけ平原王墓の連玉（重層ガラス連珠）は、モンゴルやカザフスタンの同時期墓から出土した連珠と類似し、成分分析の結果、地中海沿岸起源のナトロンを用いたソーダガラスであることが確認された点は重要である。これにより、平原王墓の連珠は中央アジア経由の「草原の道」を通じて伝来した可能性が高く、弥生時代北部九州がユーラシア規模の流通ネットワークに組み込まれていたことが浮かび上がる。伊都国のグローバルな交流の実態を示す発見として注目される。

### 5. 倭国形成との関わりは？

柳田氏の講演によれば、伊都国・奴国は弥生時代初期から青銅器文化の流入に深く関与し、朝鮮半島・中国大陸との交流拠点であり、三雲南小路王墓や奴国の須玖岡本王墓などにみられる副葬品は、中国皇帝からの下賜品を伴い、紀元前後には冊封体制下の「元始王権」として成立していたとする。副葬鏡の序列や数量は、首長層の重層的社会構造と威信財の分配体制を示しており、伊都国が倭国全体の中枢として機能したと位置づけられると評価する。そしてこの王権の移動、すなわち「遷都」のかたちでヤマト政権成立へとつながっていく可能性も示された。

南健太郎氏の講演では、北部九州・吉備・大和など西日本各地の弥生後半期の墳墓の構築様式や儀礼が検討され、それらが前方後円墳の成立過程にどうつながるかが問題提起された。

平原王墓は、地域性を保持しつつも大型墳墓が出現した例として、わが国の弥生から古墳時代への転換を理解するうえで極めて重要な位置を占めているといえるだろう。

近年、国内最多の銅鏡副葬枚数を誇る奈良県桜井市の桜井茶臼山古墳（3 世紀末）の出土品研究が進み、銅鏡の製作技術など平原王墓との共通点をより具体的に探ることが可能になった。

さらに、4 世紀後半の富雄丸山古墳から平原王墓出土品と同系の「虺龍文鏡」の出土が確認された。銅鏡を威信財とする伝統の継続という観点からも、弥生時代の伊都国で醸成された葬送文化が古墳時代の前方後円墳の副葬体系、ひいては初期ヤマト政権の成立に与えた影響をあらためて再認識させる成果といえよう。

### 6. これからの平原王墓の保存と活用

平原王墓は学術研究対象であると同時に、地域文化財としての意義も大きい。発掘成果を市民に伝える教育資源であり、市民の歴史認識を深める場ともなっている。毎年 10 月に開催される「平原王墓まつり」は、伊都国の歴史と地域文化を結ぶ行事として定着し、観光や文化交流の場としても貴重である。

なにより重要なのは、60 年前に発見・発掘調査された遺跡と「国宝」となった出土品が、研究者や行政だけでなく地域住民の手によって、永年守られてきた点であろう。発掘当時の驚きを共有した人々が保存活動を展開し、文化財指定や博物館整備へとつなげてきた。その積み重ねがあったからこそ、平原王墓は「国宝」であると同時に「地域の誇り」として「糸島」の地に継承されている。

今後も考古学研究の深化とともに、学校教育・観光・地域祭事など多様な形でその価値を発信し、次世代へと受け継いでいくことが求められよう。

第1図　糸島地域における弥生時代後期前後の主な遺跡（地図：カシミール３Ｄより引用）

第2図　調査中の平原王墓

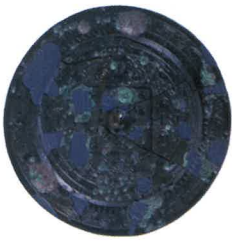
第3図　整備された平原王墓

第4図　大柱遺構

第5図　平原王墓西側からみた大柱と日向峠

第6図　平原王墓出土銅鏡集合写真

方格規矩四神鏡
＜1号鏡＞
約23.3cm「尚方佳竟…」銘



方格規矩四神鏡
＜2号鏡＞
約21.0cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜3号鏡＞
約21.0cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜4号鏡＞
約20.9cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜5号鏡＞
約18.4cm「尚方作竟…」銘

超大型　内行花文鏡　＜10号鏡＞ 約46.5cm

超大型　内行花文鏡　＜11号鏡＞ 約46.5cm

超大型　内行花文鏡

内行花文鏡
＜16号鏡＞
約18.8cm　「□宜子孫」銘

四螭鏡
＜17号鏡＞
約16.5cm

方格規矩四神鏡
＜18号鏡＞
約16.1cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜19号鏡＞
約15.9cm「尚方佳竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜20号鏡＞
約18.5cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜26号鏡＞
約18.3cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜27号鏡＞
約15.8cm「尚方佳竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜28号鏡＞
約18.2cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜29号鏡＞
約16.5cm「尚方佳竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜30号鏡＞
約18.9cm「尚方佳竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜36号鏡＞
約16.2cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜37号鏡＞
約16.4cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜38号鏡＞
約18.8cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜39号鏡＞
約18.6cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜40号鏡＞
約11.7cm

方格規矩四神鏡
＜6号鏡＞
約18.5cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜7号鏡＞
約16.1cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜8号鏡＞
約16.1cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜9号鏡＞
約16.1cm「尚方作竟…」銘

大型　内行花文鏡　＜15号鏡＞
約27.1cm「大宜子孫」銘

＜12号鏡＞　約46.5cm

超大型　内行花文鏡　＜13号鏡＞　約46.5cm

超大型　内行花文鏡　＜14号鏡＞　約46.5cm

方格規矩四神鏡
＜21号鏡＞
約20.5cm「尚方佳竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜22号鏡＞
約18.7cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜23号鏡＞
約19.1cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜24号鏡＞
約18.8cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜25号鏡＞
約18.8cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜31号鏡＞
約18.6cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜32号鏡＞
約18.8cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜33号鏡＞
約18.8cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜34号鏡＞
約16.6cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
＜35号鏡＞
約16.6cm「陶氏作竟…」銘

国宝　**平原王墓出土銅鏡一覧**

着色している鏡

原型が同じ兄弟の鏡

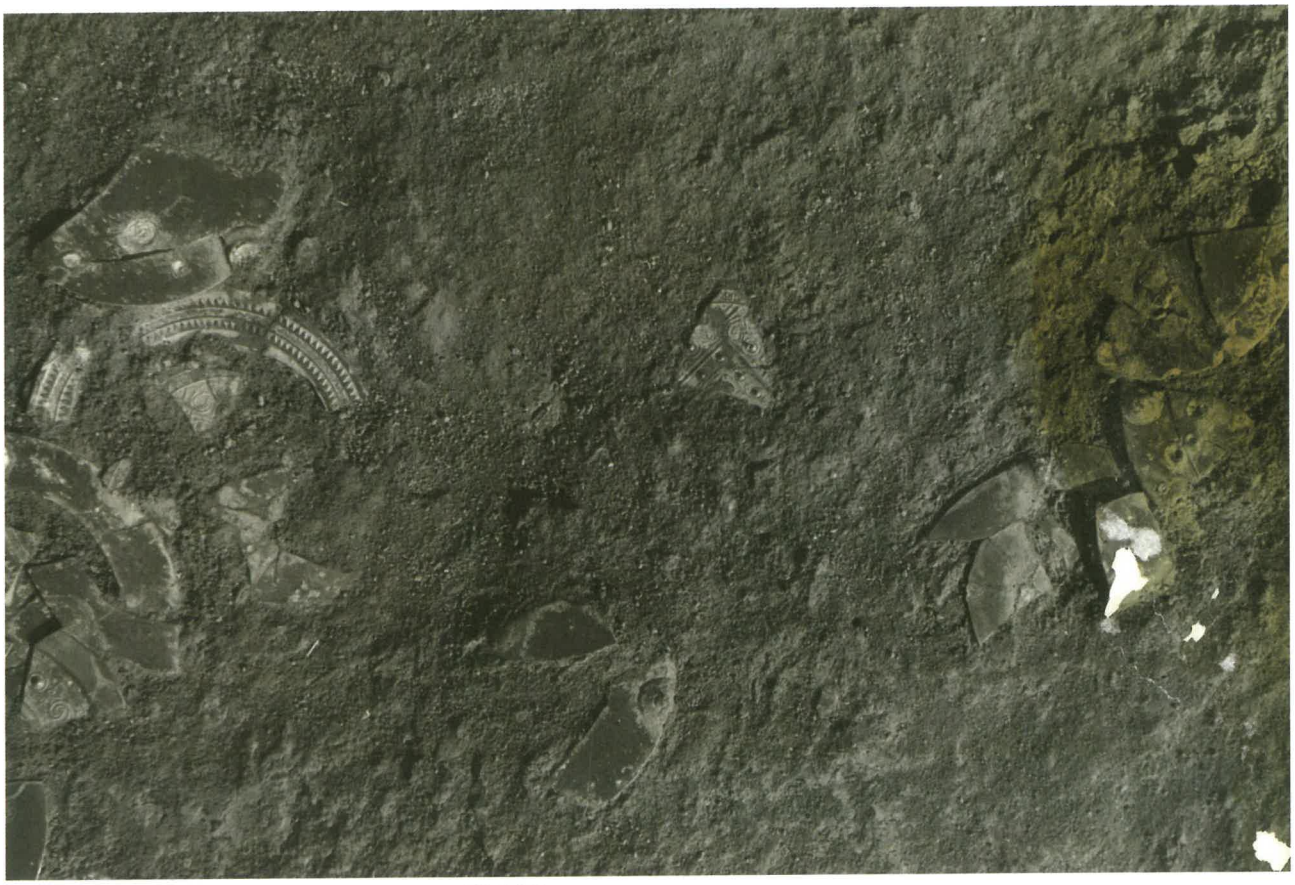
第7図　平原王墓出土銅鏡一覧

平原王墓から出土した銅鏡40枚すべてをほぼ同じ縮尺で並べてみた。膨大な数と国内最大を誇る内行花文鏡の大きさに迫力を覚える。ただこの鏡、一つ一つをよくみていくといくつかの意外な点に気づく。主なものとして、まず、鏡の種類が少ないこと。大きく分けると3種類だけである。方格規矩四神鏡32枚、内行花文鏡7枚、四螭鏡１枚で、大部分は方格規矩鏡が占める。つづいて、同じ原型から造られた兄弟鏡が多いこと。超大型内行花文鏡5枚1組を先頭に方格規矩鏡では5組、あわせて6組の兄弟鏡がある。最後に薄い色を塗った鏡の存在。半分に近い18枚にみられる。この着色は鋳造後、意図的につけられたことはわかっているが、絵具のような顔料を塗ったものではなく、手法については謎となっている。割られるなどの埋葬手法だけでなく、それぞれの鏡についての謎も今後解いていく必要がある。

第8図 平原王墓銅鏡出土状況①

第9図 平原王墓銅鏡出土状況②

第10図　平原王墓銅鏡出土状況③



第11図　平原王墓銅鏡出土状況④

第12図　７号鏡　方格規矩四神鏡

第13図　10号鏡　内行花文八葉鏡

第14図 ガラス勾玉

第15図 ガラス小玉

第16図 メノウ管玉

第17図 ガラス管玉

第18図 ガラス連玉

第19図 ガラス小玉出土状況

第20図　素環頭大刀

第21図　鉄鏃他鉄器

第９回 伊都国フォーラム

# 倭国形成と平原王墓

－平原遺跡発掘60周年記念－

発行日　令和７年10月26日
発　行　糸島市
〒819-1192
福岡県糸島市前原西一丁目１番１号
電話 092-332-2093（文化課）
印　刷　株式会社重富プラス

第９回 伊都国フォーラム